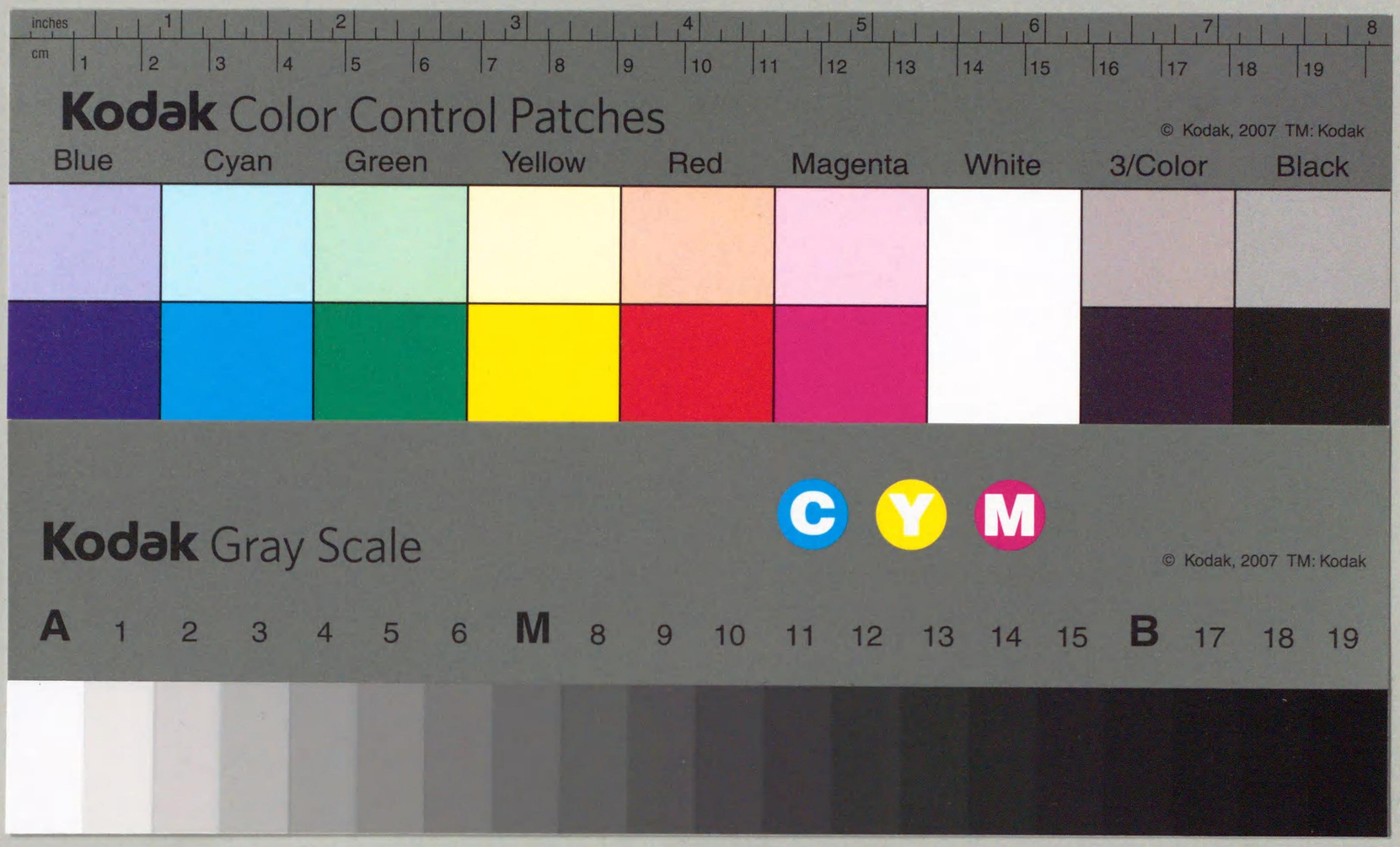
inches
cm
Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue
Cyan
Green
Yellow
Red
Magenta
White
3/Color
Black
Kodak Gray Scale
C
Y
M
© Kodak, 2007 TM: Kodak
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

116
137

少女文庫
第叁編

内國少女鑑

116
13ヶ

內國少女鑑

緒言

凡そ、人の感じは、其自己に近きものによりて起ること多きを常とす。故に、楚人は楚歌に感じ、越人は越歌を悅ぶ。されば、其位置の近きもの、其境偶の似たるもの、其好惡の均しきもの、みな以て、そが喜怒哀樂の情を發動すること、極めて甚しきものなり。就中、其年齡の相均しきは、尤も其感情を惹くこと强きを覺ゆ。況んや、幼少の兒女等は、其腦力の發達、未だ十分ならざるが故に、自己と均しからざる者に及ぼす觀念は、極めて薄きものにこそあれ。こは、恰かも、三尺の童子に、五尺以上の場所に在る物體を仰ぎ見よと言ふが如く、決して、其何たるを認ること能はざるな

り。斯かれば、年少の女兒には、宜しく年少の女兒が事蹟を示し、其嘉言善行を指摘して、以て能く其道に進むの指南車たらしむべし。己れ是れを惟ふこと茲に年あり。より〳〵に集め置きたる、少女が忠貞孝義の言行を、更に今、取捨補綴して、一卷となし、彼れらが家庭の教艸にもと覺ゆるは、則ち彼の感じの近きものによりて、善を勸むるの階梯たらしめんと希へばなりけり。

明治卅四年十月

著者誌

少女文庫第三編

内國少女鑑目次

一　父母に孝行なりし少女……一
○橘妙媛……一
○微妙女……八
○左崎里也女……一三
○北野の留女……二六
○下方の染女……二九
○鏡味のぶ女……三五
○杵築のはつ女……三九
○深川のさよ女……四六
○古部の登利女……五二

○中田多津女……五六

二　主君に忠義なりし少女……六二

○奥州の采女……六二
○堀尾順女……六五
○松田さつ女……七八
○備前のもん女……九三
○小松原の綱女……九八
○倉敷の多藝女……一〇二
○沖村の波留女……一〇四

三　同胞に友愛なりし少女……一一五

○夜叉姫……一一五
○奈良左近が妹……一一八
○大阪の富女……一二五
○犬飼増女……一三一
○鐘尾不天女……一三三

四　婢僕に對するに道を以てせし少女……一三六

○上東門院……一三七
○毛利元次の女……一三九
○荻山直女……一四五

五　慈善の行ひありし少女……一五四

○山城の幼女……一五四
○鈴木氏の少女……一五八

六　才學に秀でたりし少女……一六二

○有智子内親王……一六二
○繪島の海女……一六五
○石見の海女……一六八
○延政門院……一七三
○掄子女王……一七六
○平親清女……一七八
○井上通女……一八〇
○加賀の千代女……一八三

○高島文鳳……一八八
○稅所敦子……一九一

七　手工に長じたりし少女……一九八

○中將姫……一九八
○北山の刀自……二〇〇
○永井志加女……二〇一

八　剛勇なりし少女

○米澤の婉女……二〇四
○東京の某女……二一〇

少女文庫
第參編

内國少女鑑

下田歌子著

一　親に孝行なりし小女

○橘妙媛

妙媛は橘逸勢の女なり、(逸勢は、清友の子なり。隷書に巧みなり。嵯峨上皇御病重かりし頃、阿保親王に御謀反を勸め奉りしといふ罪によりて、配流に處せられし人なり)父逸勢、罪を得て、伊豆國に流されんとあるに、妙媛、是れを聞きて歎き悲み、警固の武士が袂にすがりて、

私は、ごんな目に遇ひましても宜しう御座いますから、何卒、

父の供を許して下さい。

泣く〳〵請ひ求めけれども、許さるべくもあらず。

御身は、まだ年が少ないから、そんな事を申しても、其儘にさし置かれるのだが、餘り、左樣な無理を、度々申さるゝと、父上の爲にもならぬ。早く此所をお立ち去りなさい。

と荒々しく、引き立てゝ、父の見えぬ方へと、追ひ遣りぬ。妙媛、今は力無く、隔つる垣の彼方より、牢輿の内に閉ぢ籠められて、舁き出ださるゝ父が姿を、泣く〳〵見送り參らせけるが、いかにしても、此儘に、都に止まるべくも覺えねば、其夜眞夜中に家を忍び出でゝ、夜に歩み、日に宿り、見え隱れに、父が跡を慕ひ行きけり。されど、昨日までは、腰元乳母に傅れて、深窓の裡にのみ在りし身の、今日は、一筋の杖をのみ力にて、馴れぬ山路を分け迷ひ、賤が屋の破丹生の軒に枕かる侘しさ怖さに、身も慄はれ、心も消えぬ。況て、人目を憚るなれば、其辛苦、其艱難、譬ふるにものも無し。ほの〴〵と、押し明け方の空の光に、父は彼方に在すること、遙かに牢輿を伏し拜みつゝ、往き〳〵て、遠江國板築の驛といふ所まで來にける程、牢輿は止まりて、夜は明け離れたれども、出でんともせず。又次の日も、止まりて發せず。餘り不審に覺えければ、恐る〳〵、道行く人を呼びて、其故を問へば、流人の君は、一昨夜より、重き病に煩ひて、打ち臥し給へりと言ふ。さては、左樣の譯にてありけるかと、妙媛、今は身の咎めも打ち忘れ、假屋の中に走り入りて、

私は、父の都を出まする時に、叱られて止まりました。妙媛で御座ります。其後ごうしても、父の事が案じられてなりませぬゆゑ、御跡から、見え隱れに附いてまゐたのです。……而し

まシたら、今日、父は大患に罹つたと申す事を聞きまして、

と、是れ迄言ひたれども、涙に妨げられて、後は言ひもやらず。やうやうに、息をつぎ聲に力を入れて、

もう、父は死にます。今死ぬ者ですから、いかに、重い罪だつて、ごうぞ、お慈悲に、小供の看病を、お許し下さいま

し。

身を慄はせて、泣き入るさまを見ては、さすがに猛き警護の武士も、えこゞめあへず。

其れならば、内々で看護を許して上げよう。お上のお慈悲を有難く思いなさい。

と言ひければ、妙媛は、天にも登る心地して、急ぎ父が臥戸に馳け入り、衰へ果て

し體を抱きて、泣く〳〵、右の事を咄し、今よりは、妙媛あれば、心強く思ひ給へと、慰めけるに、逸勢は、且つ驚き、且つ悅び、淋しき笑みを浮べて、女の手をしかと握りたれども、はや息はづみて、思ふ事もえ言ひあへず。たゞ力無き眼にはら〳〵と涙を流しぬ。斯くて、しばしある程に、逸勢が病、次第に重りて、露の消ゆるやうに消え入りて失せにけり。妙媛は、さりともたのむの鴈の音になくのみ、今は千度八千度、打ち歎くも、かひ無き事と自ら思ひ強りて、此里に、父が亡體を葬り、其邊りに小さき庵を結び、己れは髪を剃して、尼となり、名を妙冲と改めて、亡父が後世を吊らひ、墓前に、香華を手向くる事をのみ旦暮の務めとしけり。

さる程に、公けにも、逸勢が罪を許して、位を復さしめ給ひしかば、妙冲、大いに悅び、父が遺骨を棺にをさめ、之を背負ひて、都へ還り、改葬して彌其冥福を祈るより、外に餘念無かりき。

妙媛年少にして、父が配流を悲しみ、公けの咎めをも忘れて、其後を慕ひ、父が大患に罹るに及び、其看護に力を盡し、沒する後にも、猶死に事ふること、生に事ふるが如くし、尼となりて、一生を佛門に投じたる、其當時に在りては、まことに賞すべく。感ずべく、一點の非難を試むべきもの無しと雖ども、今の如く、世の中開けて、女子も、亦、社會の爲に力を用ふべき場所廣くなりたれば、父沒して後は、猶、外に路を求めて、世の爲、人の爲にも、身をつくしてこそ、父が亡魂をも慰めつべきなれば、昔の跡を見ては感服すべき事も、今に取りては、妙ならぬ事もあるものなり。能く考へて善き路に從ふべし。

○微妙女

微妙は、右衞門尉爲成の女なり。父、罪を得て、蝦夷に流され、母は、これを憂へて、病を發し、遂に亡き人の數に入りぬ。微妙、是時、歳僅かに、七歳なりしが、いかにもして、權門に出入し、父が赦免を愁訴して、母の亡魂をも慰めまゐらせばやと思ひけれども、幼き女兒の身として、然るべき手段を見出だすべきよしも無し。其頃、都にて行はるゝ白拍子といふものは、其技巧みになれば、高貴の方々にも召さるゝよしを聞き、自ら進みて、舞曲を學びぬ。(白拍子は、當時、靜、千壽の如き、名媛ありて、今の世に賤しき業といふめる者の如き類にはあらざりしなり)もとより、父の罪を贖はんとの、孝心より志したるなれば、其技藝の上達は、人も驚くばかりにて、齡十三

四に及ぶ程には、はやう都に隱れなき、妙手の褒れ高かりけり。斯くて、微妙は、つてを求めて、鎌倉に下だり、いかにもして、將軍賴家に近づきまゐらすによしもがなと、其機會を待ち渡りけるに、一日、賴家、比企能員が家に至りて、宴を張られける折、能員が招きに應じて、其席に列なり、舞曲を奏する事となりにけり。微妙は、是時にこそと思ひて、先づ、事の樣を、主人能員に申して、其取りなしを請ひけるに、能員も、いと憫然に覺えて、必ず助力なすべき旨を答へぬ。斯くて、數番の舞も終りける程、賴家は、能員にむかひて、

今日の饗應、深く滿足に思ふ。殊に、舞媛が舞、最も絶妙であつて、頗る、平素の鬱を晴らした。……但し、彼の女子は、誰れ人の子で、名は何と言ふぞ。物ごしつまはづれ、並々の白拍子とは見えぬが、

と問はれければ、能員好き折ぞと思ひて、あれは、箇樣々々の者斯う〳〵の願ひによりて、身を舞媛にもやつしたるなりと物語りまゐらせければ、賴家も、いたくあはれがりて、

微妙を、これへ

とありければ、能員畏こまりて、御前に招きぬ。微妙は遙か末座に平伏して仰せを待てり。賴家聲をかけて、

微妙とやら、汝は、愁訴のよしありて、鎌倉へ下向せりと聞く。苦しう無い。何なりとも申して見よ。

微妙は、忝けなさと、嬉しさに、堰き來る涙とゞめあへず。

有難き仰せ、身に餘りて、忝けなく存じ奉ります。……比企殿より、仰せ上げられし通り、父が遠流に處せられました爲に、母には無き人の數に入りましたのが、いかにも殘念で御座ますゆゑ、何卒、父が生死を一通り御取調べ下さりまして、若しも、猶、此世にあるならば、息の中に、赦免の御沙汰を、ごうぞ、御慈悲に希ひ奉ります。

泣く〳〵、請ひ申したりければ、賴家打ち頷きて、

よし〳〵、然らば、先づ、其生死を探り遣はすであらう。

こて、直ちに、使者を馳せて、蝦夷地を尋ね求めさせられけるに、爲成は、既に、配所に、病死せるよし聞えければ、微妙は、天に叫び地に泣きて、

私は、良家の子と生れながら、白拍子ごまで、身をやつして、多くの人に交際らひし事も、たゞ單へに、父が罪を贖はん、手段にもがなとのみ願ひたるに、最早此世に望み無し。速かに、形ちをやつして、父母の後世を吊らひませう。

斯く云ひて、綠の黑髮を、根元よりふつと搔き切りぬ。人々、あなやと驚きて、いかに止むれども、承引かず。黑染の衣を身に纏ひて、名を、持運と改め、是れより、佛門に入りにけり。賴家の母政子、このよしを聞きて、深く其孝心を感賞し、持運が爲に、居宅をしつらひ、費用を贈りて、其志しを遂げしめられきとぞ。

微妙、幼うして、父母に別れ、貧困の苦境に陷りても、なほ、父を救ふの志したゆまず。不幸にして、其生前に、相ひ見ることを得ざりしかども、其孝義は、遠く、後世に傳へて、人の子のかがみとなる。まことに、最良じき事なれども、惜むべし、この少女、身を白拍子におとして、他の宴席に陪し、家門の名聲を低うせし事、返すがへすも、遺憾の至りなり。勿論、當時の白拍子は、社會の待遇も、思ふに今の、能役者の如き程の者にてありしならんなれども、兎にも角にも、微妙が孝心は善みすべくして、其方法は嘉みす可らず。世の親に孝なる女兒、能く心して見るべき事なり。

○左崎里也女

讃州丸龜の城主、京極備中守高豐が弓組の足輕に、左崎幸右衞門と云ふ人あり。其妻の容色優れたるを見て、同役の岩淵傳內（一つに一崎に作る）と云ふ者、深く之を戀慕し、夫幸右衞門不在に來たりて、挑みけれども、妻固く、貞節を守りて、心に從はず、兎角して、時を移しける程に、幸右衞門歸り來て、此有樣を見、大いに怒りて、

傳內、無禮だ。……承知せぬぞ。

大喝一聲するを聞き、傳內は、更に噪ぎたる氣色も無く、一刀を拔くよと見えしが、忽ちばらりずんと、幸右衞門を袈裟がけに斬り

斃し、後をも見ずして、裏口より一散に逃げ出だしければ、妻は遁さじと、脇差を拔きて、追ひかけくれども、間既に隔たりければ、

残念ッ、

と叫びて、刀を投げつけくるに、慥かに、手ごたへして、右の肩に當りし樣なれども、傳内の姿は、遂に見えず成りぬ。妻は泣く〳〵、此由を、領主に訴へ出でければ、有司達詮議ありて、岩淵は、妻子もある身にて、人の妻に戀慕し、剩へ、其夫を殺害したる段、不屆至極の者なれば、尋ね出だして、重刑に行ふべし。又、左崎が妻子は、不憫の者なれば、妹婿關根元右衞門引き取りて、世話致すべしとて、即ち助扶持を賜はりぬ。斯くて、親戚相ひ議りて、妻なる人に、入夫を勸めけれども、妻は、一女を守り育てく、夫の後を嗣がしめたしと言ひて、更に承引くべくも見えざりしかば、人くも、其貞節に感じて、敢て復た再び言はざりしが、其翌年、妻は病ひを得てつひに沒しぬ。殘るは、今年僅かに、三歳の女兒一人なり。叔母夫婦も、不幸なるこの小兒を、我が子として、いとをしみつく、養ひけるが、春去り秋と暮れて、女里也も、既に(幼名とよ)十三歳に及びぬ。一日、叔母夫婦は、里也女を招きて、

里也よ。おまへは、是れ迄、自分達が女として育てたから、何も知るまいが、實は、おまへの父は、岩淵傳内と云ふ者に殺害され、母は是れを殘念に思つて、こう〳〵病みついて、其翌年の二月に死つてしまつたが、其息を引き取る迄も、くれ〳〵も、夫の横死を殘念がつて、アヽ、此女が、男であつたならば、是非とも、父の讐を打たせるものを、と言つて、悔しがつて死つたのであるから、おまへは、一層、人に笑はれぬやうに、立派な人

間にならねばならぬよ。

と言ひ聞かせければ、里也の驚き一方ならず、暫時は、さめ〴〵と、涙にむせびて、打ち泣き居たるが、やゝありて面を上げ、

今日迄、ちつとも、存じませんで、阿叔方を、全く本當の親とばかり思つて居りましたのに、さては、左樣言ふ譯で御座いましたか。左樣伺ひましては、殊に、海山の御養育の恩を、報じまする事の出來難い事を怖ろしう存じまする。ごうぞ、是れ迄の通り、御目かけられて、お教へを願ひます。

幼き女兒に似げ無く、立派に答へたりしが、是れより後は、一層、叔父母に、能く事へて、世間の褒め者となりぬ。斯くて、里也、十八歳といふ年の春を迎へけるに、ある時、叔父母の前に出でゝ、

私は、今日まで、かやうに、お育てを戴きました御恩の、萬分一も報じませぬのに、今また、こんな我儘を申しまして、何とも恐れ入りますが、何卒、私を、江戸表へお出し下されまして、何方へか御奉公を願ひ、二三年も立ちましたならば、全國三十三ヶ所の觀音樣を、巡禮致して、父の讐をお打たせ下さるやうに、願がけを致したう御座りますから、ごうぞ、御許し下さりませ。

と云ふ。叔母之を聞きて、

其れは、ごうも、感心な心がけではあるが、女の力で、とても、讐打なんて、出來る事で無いから、そんな、考へはよして、然るべき婿を迎へて、家名を嗣ぐ事にした方がよからう。

叔父も亦、

其れは、兎てもむづかしい事だから、叔母樣の云ふ通りにし

た方が善いよ。

互み代りに、こゞめけれども、里也は、たゞ〳〵こゞ願ひて、更に、思ひこゞまる氣色無ければ、

其れ程に思ふならば、何こか考へて見よう。

斯く云ひて、其れより叔父は、同家中の、村瀨東馬といふ人の、江戸詰こなりて、此度、出府すべしこ云ふを聞き、幸ひ、同氏こは、兼て知る中なりければ、同家に至りて此由然々こ語りて、依賴しげれば、村瀨も里也が孝心に感じ、早速、江戸表へ召し連るゝ事を約しぬ。

里也は、村瀨に伴なはれ、江戸に至りて、奉公口を求めけるに、折節、番町に住まひける、永井源助こ云へる、二百石取の旗本、婢を召しかゝへたしこある由聞えければ、先づ、早速、其家に事ふる事こなりぬ。この永井なる人は、劍術の師範なれば、門弟も多く出入して、いこ賑はしき家なりき。里也は、願ひある身にしあれば、殊に、萬事に注意して、奉公大事こ勤めける儘に、源助夫婦も、二無き者に思ひて、愛で慈しむ事大方ならず。一日夫婦は里也に對ひて、

御身は、田舍の者のよしに聞いたが、立ちぶるまいこ言ひ、手跡こ云ひ、中々立派な者だ。こうも、百姓町人の娘こは見えぬが、何人の子であるか。包まず咄してはくれまいか。

いこ親切に問ひければ、里也は、此日頃、賴もしき主人夫婦の心は知りつ。中々に隱しては惡かりなんこ思ひて、

有難き仰せ。今更何をお包み申しませう。

こて、里也は、一層聲を低うし、かやう〳〵の事により、親の讐を尋ぬる者なりこ物語り、

唯今申上げました次第で御座りますが、今日までも、一向、讐

の手がゝりも御座りませず。此後ごう致したら、讐を討つこと出來ませうかと存じますと、まことに、胸が裂けるやうに成りまして

と、後は涙に詞もとぎれぬ。夫婦はこれを聞きて、且つ驚き、且つ感じ、さらば、御身に力を添へて、本望を遂げさせん。其れには、先づ、讐を討つべき業を教ふるにしかずとて、是れより、源助は、毎日、里也に劍術の稽古をなさしめけるに、里也は、女にてこそあれ、父の讐を討たんと云ふ、精神こもりし太刀さきは殆ど、向ふに對無き迄驚くべく上達し、僅かに、一年半ばかりにして、其大刀筋を習ひ得たりき。さる程に、源助夫婦は、更に、里也の請を入れ願ふがまにまに身に暇を遣はしぬ。里也は、永井家を出でゝ、此所に半月彼所に十日と三ヶ年の間に、主を替ふること、七十餘人の多きに達し、さ

親に孝行なりし少女

まく〳〵の人に廻り逢ひけれども、猶似たりと思ふ者にも逢はず。兎角して、本所に住まへる、坂部安兵衛といへる、四百石取の旗本に事へけるに、當家は、小臣の事なれば、召使ふ者とては、若黨一人、中間、婢女ともに、四五人なるが、若黨は、小泉傳内と呼ばれて、年五十餘の極めて、快活なる男なり。或時、傳内酒に醉ひて、さま〳〵の手柄咄しをしける節に、己れが、武勇の自慢をなし、尙、興に乘じて、

私は、若い時は、何でもしようと思ひ立つた事を遂げ無い事は無かつたが、其中に一人、強情な女があつて、我が心に從はなかつたから、手荒い事をしようとした所へ、其夫が還つて來たから、一刀の下に斬り殺して、國を立ち退いたが、ア、ア、今思へば若氣の至りで、薄々聞けば、我れ故に、親も妻子も、放逐せられたそうな。つまらぬ事をしました。

と歎息したるに、里也は、胸にひし〳〵と思ひ當る節の多きに、覺えず、小膝を進め、いかにもして、此男の姓名を糺さんと、わざと空こぼけたる容子を粧ひ、

傳内樣、僞言ばつかり、……何、貴下が、そんなに強いもんですか。御覽なさい。ひよろ〳〵して被爲入るじやありませぬが。

傳内は、やつきと成り、

其れは、今は、酒に醉つてるからだ。本當に強かつたんだ。

里也はいよ〳〵嘲り笑ひ、

僞言々々、屹度、僞言です。……ヱ、、本當だつて、そんなら、何時、何方で、

傳内は、少し小首を傾けたりしが、

ヱ、宜いワ〳〵、もう、廿二年の昔、國許であつた事、おまへに

咄したつて、大事もあるまい。私は、もと、讃州丸龜の藩だが、こ是れより、左崎を討つたる一部始終を物語りければ、里也は大いに悅びて、躍り立つ胸を鎭め敢ず。名乘りて討んと思ひしが、いや待て暫時、年は寄りても、敵は腕に覺えある剛の者、仕損じては一大事なりとわざと笑ひに紛らして、其夜は程よく其座をはづしぬ。其翌日、里也は、主人に暇を請ひ、急ぎ、舊の主人、永井方へ至り、此由を告げ、同道して、村瀨東馬を訪ひ、事のさまを語りければ、村瀨もいたく悅びて、先づ、主君備中守へ上申しけるに、守も深く滿足に思はれ、早速、坂部安兵衞に掛け合ひて、岩淵傳內を申し請ひ、里也と對決せしめけり。傳內始めの程は、彼れ是れと陳辯しけれども、遂に包むによし無くて、ありのまくを白狀に及びぬ。即ち、守家老に命じて、

里也は、まことに孝烈の女子である。余は頗る感心致す。是れは、他の者の奬勵にもなる事であるから、下屋敷に於て、立派に、仇打を致させェ。而して、奧女中にも一家中の者にも、見物を許すが宜い。

斯く掟てられければ、重役達畏こまりて、其れ〳〵仕度に及び、村瀨は、里也が介添として、仇打の作法、形の如く取り行はれぬ。里也妙齡の女子の身を以て、故無く、父の仇を打ちぬる事、單へに、神明の、この孝女を助け給へるならんと、感ぜぬ者も無かりけり。斯くて、守には里也を、士分に取り立て、息女の傳こせられしが、後に、局役にまで、進めしめられたり。里也は、師なる永井が恩に感じ、守に請ひて、永井の局と稱へぬ。

尙武を以て、德の基礎とせし、武家時代に在りては、里也が行ひ、ま

ここに間然する所無かるべし。一念の凝りたる太刀さき、向ふに對無く、女性の纖手、能く、豪剛の老卒を斃す。實に、當時の壯圖と云ふべし。

○北野の留女

留女は、三河の國岡崎の近郷なる、北野村の人なり。家貧しくして、朝夕の烟も細き生計なりしに、父は、幼き時病沒りぬ。今は母の手一つにて、僅かなる瘦田耕すもいとあはれなり。少女留は、このさまを見て、憂き事に思ひ、まだ力無き小腕に鋤を取り、鍬を擔ひ、幼き弟利右衞門を勵まして、母を助くること大方ならず。自らは、つねに、野生の嫁菜、蒲公英などを摘み、又は、干葉などをのみ貯へ置きて是れらを鹽煮にして食し、母には、出來得べきだけ、甘味の物をまゐらせぬ。且つ母に事ふること、極めて、恭しく、膳を薦むるにも、目より高くさゝげて、丁寧に据うるさまを、見傚ふ弟も、同じく、母を敬ひ尊べる、禮節の嚴かなる、まことに、貴人の家庭と雖ども、これには過ぎじと覺えけり。されば、いか程、急ぎたる時にても、母食せざれば、留女も、利右衞門も決して箸を取る事無く、母と共ならざれば、假初にも、遊歩などに出づること無し。されば、雪霰降りしきりて、肌へ氷るばかり寒き朝たにも、母爐によらざれば、小供は火に近づかず。黑金も鎔くるばかり、暑き日にも、母浴みせざれば、兩人も敢て湯をあみず。肅然として、能く母に事ふる形狀を見もし聞きもする、近隣の人々は、單へにたゞ、神の再來、佛の化身とまで褒め稱へて、この姉弟をぞ、師とし敬ひける。斯くて、留女妙齡に及びければ、親戚朋友の甲乙、相ひ議りて、良き家に嫁入らしめ

んと勸めけれども、さらでだに貧しき家に、我れ無くては、いかに、弟の困苦して、且つ、母の養ひも疎かにぞ成りぬべきことて、更に承引く氣色も無く、同胞心をひつにして、耕耘の業に身を委ねけるまゝに、

僅かの田畑も、次第に肥えて、今は凶年にも、この田地のみは、米穀能く實のるやうに成り、從ひて、一度も、租稅を怠りし事無し。されば、領主にも、深くこの姉弟が孝行、勉勵を賞讃ありて、米二石、銀四十兩を賜ひしが、重ねて、米二石を賜ひ、別に、留女に、銀四十兩を賜ひぬ。斯かりければ、其家も、やう〳〵豐かになり、同胞の者は、思ふがまゝに、母に孝養することを得て、いよ〳〵深く、領主の恩德を感じ、ます〳〵其行ひを愼みけるこそ。留女兄弟が孝行、まことに感ずべく、嘉みすべき事蹟といふべし。古語に、德は孤ならず。必ず隣りありとは、是れらの事をや言ふべからん。世の年少の女兒達手本として見習ひ給へ。

○下方の染女

染女は、日向の國那珂郡、下方村と言ふ所に、鹽製造を業とする者の子なり。然るに、染が二歳の時、其父を喪ひ、母の手に生長せしが、五歳の頃、火災にかゝりて、家屋什器、何一つも殘らず、燒け失せぬ。始めより、豐かにもあらぬ家の、打ち續く不幸に、いとゞ貧しく成り增りぬる上に、老いたる祖母、白痴なる伯母あり。實に目も當てられぬありさまなりけり。斯くて後は、鹽燒く小屋の內に、竹の床を編み、辛うじて、雨露を凌ぎぬ。又、染女が七八歳の頃より、母も眼病を煩ひて、いとゞ詮方無くなるまゝに、染は、これをいたう悲しみ歎き、いかにもして、家計を助けんと愚かなる伯母にむかひて、恰かも、親の小兒に對するが如く、懇ろに言ひ聞かせ、母に請ひて、鹽燒く業を傳へ、伯母とゝもに鹽を製し、自分は、毎日、一袋の鹽を擔ひ、市に出でゝ、之を賣り、僅かの利を得て、家に還り、四人の口を養ひぬ。然るに、母の眼病は、日を經て次第々々に重くなり、今は全く、自身の自由を足すことさへ協はずなりければ、染女、大いに憂へもだへて、人に問ひ聞きけるに、其當時、同郡湯島といふ所に、眼の良醫ありと言ふに、さらばとて、診察料の金子を、人に借り、母を背負うて、治療を請ひ、加養に愚かならざりけれども、醫藥も、遂に効を奏せず。全く盲目となりにけり。こは是れ、染女が十二歳の年なりき。斯くて後、祖母はますゝ老耄し、母も、廢人となりにければ、染が小腕に、薪こり、鹽を燒きて、細き烟を立てけるぞあはれなる。されば、夏は破れたる蚊帳を、いやが上に繼ぎ合はせて、僅かにこれを、祖母と母とにまゐらせ、冬は、薄き蒲團一二枚を三人の長者に分ち、自らは、寒さ暑さの苦しみに耐へて、はかなき一睡の夢に、晝の勞れを慰めぬ。さる程に、飫肥藩知事、郡村を廻りける

時、染女が孝行辛苦の狀を聞き、召して、米五斗を賜ひ、其善行を表されき。染は、斯かる賜物を得しより、いとゞ志しを勵まし、行ひを愼み、孝養至らざる所無かりしが、染女十六歳と言ふ年に、祖母、數日の病ひに沒し、母も、日頃より、重き枕に沈みしが、一ケ月を經ずして、ついで沒しぬ。この病中は、穢き物絶えず下だりて、臭氣に耐へぬ程なりけれども、染女は、つゆばかりも、厭へる氣色無く、日夜、帶を解かずして、看病怠り無かりける効もあらで、遂に空しく成りにければ、其悲しみ譬ふるにもの無く、一時は慟哭して、絶え入りぬべく見えたりしが、斯くてはならじと、自ら、心を取り直して、葬儀萬端を、一身に引き受けて、取り整へしが、貧しき家に合はせては、實に遺憾無く、行き屆きたりとて、近隣の者、みな感じあへりこぞ。

其後、或人、染女が孝行を聞き傳へ、わざ〳〵此家を訪ひて、

おまへは、實に珍らしい孝行者で、大きに感心を致した。……が、十餘年の間、かやうな、艱難の中に在つて、嘸、いろ〳〵、苦しい事が澤山あつたであらうが、其中、何が一番苦しいと感じたかエ。

と問ひければ、染女は涙さしぐみて、

私は、物心を覺えましてから、貧乏な中にばかりに育ちましたのです、左樣言ふ事で、難義致します事は、別に苦しいとも存じませぬ。三日も食べなかつた事もありましたし、一錢のお錢も無くなつて、幾日も居つた事もありましたし、又、寒くて寐つかれぬ晩も、暑くて眼がくらむやうな日もありましたけれども、其れは、もう、日常の事で、別に苦しくてたまらぬ

こは存じませんでした。……けれども、母が死くなります臨終の時までも、私の家は、昔はこんなに貧乏では無かつたのだ。火事に遇つて、こんなに成つたんだから、どうぞ、一生の中に、今一度、昔のやうな家らしい家に入つて見たいと申しましたのに、中々家を造る所では御座りませぬ。壊れた所の繕ひさへ、碌々出來なかつたんです。……私は、この事を聞く時が、一番苦しう御座いました。今でも、其れを思ひ出しますと、眠い時でも、眼がぱつちりと明いてしまいますし、饑い時でも、食が咽へ下だらなくなつてしまいます。

言ひかけて、又、はら〳〵と涙を落しければ、其人大いに感服して、

是れはいさゝかながら、おまへに進ぜたいからこて、米一俵を取り寄せて、おくりけるに、染女は固く辭して受けず。最早、母も無く祖母も無し。今は誰れにか見せんとて、承引かざりしを、客しば〳〵すゝめければ、漸くに受け納め、直ちに、母が靈前に、これを供へて、生きたる人に言ふ如く、其狀を告げゝるを聞きて、客はます〳〵感涙にむせびけるこそ。實に類ひ稀れなる孝女と言ふべし。

○鏡味のぶ女

のぶ女は、尾張國愛知郡、熱田の社人、鏡味福本太夫が女なり。母は、同じ社家の女なるが、鏡味に嫁して、一女を擧し後、家はます〳〵貧困に陷り、到底、親子三人の生活覺束無く成りにければ、夫婦談合の上、妻は、女ののぶを連れて、生家へ還ることゝなりにけり。斯くて、其幼き女は、父母に預け、己れは、京都に登りて、或家に奉公し、

少しは貯へも出で來たれば、故郷に殘し置きたりし、少女をも迎へ、これをも、某家に奉侍へさせけり。然るに。のぶ女が父、福本太夫、神事の頭人役と言ふことにあてられし事ありけるに、のぶ女、其由を傳へ聞き、母のもとに至りて談りけるやうは、

阿母、阿爺は、今年、頭人役をお勤めなさる事になつたさうです。彼の通りの御難義ですから、嘸や困つてお出でなさるだらうと思うて、心配して居ます。……ですから阿母、ごうぞ、私に、暫らくお暇を頂戴することに、御主人樣へ御願ひ下ださりまして、私は、いさゝかながら、お給金の溜めてあるのを持つて、阿爺の所へまゐつて、其れをも差し上げ、又、出來るだけの御手助けをも致して、首尾よく御用をお勤め成さるやうにしたいと思ひますから、何卒、阿母、御聞き屆け下ださりませ。

と申出でければ、母も、我が女の孝心に感じ、

汝の孝行には、本當に感心するよ。左樣言ふ決心なら御主人樣からは、御暇を取つて上げるから、早速、國へ下だつて、阿爺の御助けをして上げておくれ。……而して、私も、出來る丈の儉約をして、お給金を溜めて置いたから、其れも、みんな、集めて進ぜう程に、早う出立の用意をなされ。

のぶ女は、母の親切なる詞に、いよ〳〵勇み立ち、急に支度を整へて、都を立ち出で、尾張國に下だり、久々にて父の許に至り、斯樣々々の譯にてまゐりたりと談りければ、父は、感涙にむせびて、

私は、言ひがひも無く、妻子を養ふことが出來んで、別れ〳〵になつたもの、……捨られた同樣の父に、數々の孝行、何と禮

を言うて宜いやら、詞も出ぬ。

さらでだに、涙もろなる老人の、こめご無き迄、打ち泣きけるを見て、のぶはいとゞ耐へ難く覺えけり。斯くて、神事の用も、事故無く勤めけれども、父は寄る年波に、行歩さへ不自由に成りぬ。かくるさまを見捨てゝ、また何處へか歸らるべきと、のぶ女は母の許へ文細々と認めやり、父を見送りまゐらする迄は、此儘、此所にとゞまるべしとて、其れから後は、父の看護より、家事一切の事を身一つに引き受け、或時は、人に傭はれて、遠きに使ひし、又、或時は、賃仕事等に、僅かの金錢を得て、生計の助けとせり。さる中にも、父の欲しと言ふ食物は種々の工面して、薦めけり。此事頓て、公けに聞え領主より、褒美を取らせられきとぞ。時に天明四年なり。

のぶ女、不幸にして、貧しき家に生れ、幼年の時より、父母、東西に離居し、己れは、母に伴なはれて、兎も角もして、世を渡る事とは成りにしを、猶、別れし父の事を忘れず。易きを捨てゝ、難きにつき、幾多の艱苦を凌ぎて、老いたる父を、貧困の中に養ひたる、まことに、殊勝の少女と云ふべし。公けにも此事を聞きて、其善行を賞せられたるげにさる事と覺ゆかし。

○杵築のはつ女

はつ女は、豐前國杵築の城下、上町の者なり。はつが母、嘗て、半六といへる婿を迎へ、一女を擧げて、はつと號けゝり。然るに、はつ女三四歳ばかりの年、故ありて、父半六は、離縁の事となりぬ。さらでだに、足らぬがちなる家計の、いとゞ貧苦に迫りて、朝夕の烟も細り行き、借金彌増に、かさみにければ、いさゝかの地面も、小さき家も

賣り拂ひ、不義理の借を返しつ。斯くて後は、いよ〳〵困難を極むるを見て、隣家の主人、定七といふ者、氣の毒に思ひ、薪炭米等を、をり〳〵におくりて、母子が飢を凌がせけり。さるからに、母は、さま〴〵の辛苦にいたく心身を惱ましける故にや、次第に病がちの身になりて、今は臥戸の外へ出づることさへ難く成りぬ。はつ女は、僅かに、七八歳許りなれば、事足る家の女ならんには、飲食起臥にも、まだ人の手を借る齡なるに、病める母、貧しき家に在りては、はや、生計の事に心をいため、一日、母に請ひて、

阿母、私は、お隣の阿叔に賴んだら、借してやらうと云はしやるから、錢少し借して貰うて、明日から、菓子賣に參じます。其れで、晝の間は、嘸不自由でせう。淋しからうが、辛抱して、留守して居て下だされや。

斯う優しう言はれて、母は、涙の顏を上げ、

ア、憫然に、盆が來たとて、正月が來たとて、新たらしい布子一枚着せるじやなし。まだ其れ所か、三度の食も滿祿に進ぜる事が出來ぬやうになり果てた、今日此頃、年端も行かぬ汝が、惡い顏もせずに、却て、私を慰めてくれるさへあるに、其樣な事まで考へてくれたか。エ、忝けない。今更何と言うて見た所が、外に糊口の分別も無し。やつぱりしかたが無いから、汝の言ふ事に任せませう。

はつ女は悅び勇めり。直に隣家に往きて、錢を借り來たり、其翌日より、菓子を賣り、其利潤を得て、母を養ひけり。一日の夕方、はつ女は、賣れ殘りの菓子箱を擔ひて、道のほとりに立ち、しく〳〵と泣き居たり。通りかゝりの人これを見て。

汝、何を泣くのと尋ねければ、はつ女は恥かしさうに涙を拂ひて、答へはせで、そろ〳〵と歩み始めぬ。其人再び、

エ、何が悲しいの

問はれて、はつ女は小聲に、

今日は、天氣が悪くて、餘計に歩かれませんでしたから、菓子の賣れが悪いのです。其れで悲しくなりました。

其人は更に、

菓子の賣が悪いと、阿母に叱られるかイ。

はつ女は眼をみはれり。而して聲に力を入れて、

イ、エ、阿母は叱りませぬ。

通行人 叱られぬなら、汝泣く事は無いじや無いか。

はつ女ですけども、菓子の澤山賣れた日には、阿母が大變に悅びます。賣れが悪い時は、さもつまらなさうな顏をします。私は、阿母の悅ぶ顏が見たいの……其れに今日は其悅

親に孝行なりし少女

ぶ顔が見られぬから、つひ悲しくなりましたのです。

其人は、これを聞きて大いに感じ、其菓子を買ひて、錢多くこらせけり。斯かる有樣なれば、人に、追々、孝行女の菓子賣と言ふことを傳へ〳〵て、みな、爭ひて、此菓子を買ひけり。斯くて、はつ女齡やう〳〵十三歳に及びける程には、人に傭はれて、賃銀をも得るまで成りぬ。母は、病がちなる上に眼さへ惡く成りて、物見る事をも難きに至りたれども、一人子の孝行に慰められて、今は憂き事も知らず、心樂しき月日を送りぬ。此事、遂に領主に聞え、寶曆三年四月、褒美の錢を與へて、其善き行ひを、世に旌されぬ。さて、母も沒りにければ、はつ女は、悲歎を忍びて後のわざ、手厚く營み、墓石さへに立派に建てゝ、懇ろに追福を修しけり。尙其上に、祖母の墓標無かりけるを歎きて、これをも見苦しからぬさまに建て、法會を行ひなご殘る所無くなしたれば、いとゞ費も多かるを、みなこと〴〵く手一つに取りしたゝめぬ。隣家の定七は、常に、はつ女を助けて、能くこれに力を添へけるを、はつ、深く悅びて、母亡き後は父の如く事へけるにぞ、定七も、我が子の嫁に貰ひたしと思ひけれども、子息は、不身持にて、家出をなしければ、此事も協はず。定七も、其頃より病ひに沈みける故に、はつ女は、尙更いとほしく覺えて、恰かも實子の親に對する如く、親切に看病しけり。領主、またこれらの善行を聞きて、はつ女に錢を與へて、褒賞されき。其後、定七は、身體次第に衰弱して、遂に亡き人の數に入りけるに、はつ女は、母の亡くなりし時に均しく、葬の事何くれと、取り扱ひ、行方もわかぬ子息の上を案じ居たるが、暫らくして、亡命の子息還り來て、此事を聞き、大いに先非を後悔し、家業大事に務むるやうになりしかば、

人々相談して、はつ女を娶せ、兩家の繁榮を計りけるこそ。はつ女が至誠至孝、能く、其母と、恩人とに奉事せしのみならず。無賴の子をして、篤行の人と化せしめたる、まことに、深く歎賞すべき事なりかし。

○深川のさよ女

さよは、江戸深川の者なり。母霜女といふが、夫に早く別れて、よるべ無きまゝに、人の媒つまゝに、この深川町なる、按摩春養のもとへ、幼き女兒さよを伴なひて、再嫁しけり。然るに、さよ女は、天性、心だてやさしき者にて、眼不自由なる繼父の、さぞ物事に戻かしくのみおぼすらんと恕り、旦暮心をつけて事へければ、春養も大きに悅び、なさぬ中の子に、斯くまで孝行さるゝ、我れは能く〳〵の果報者なりと、人々にも談りけるこそ。さて、さよ女が、十三四歳の頃にもや、ある武家に奉公に出でしが、親に孝ある程の女なれば、主人に對しても、またいと忠實なりければ、主人も、良き婢を得たりと滿足して、何にても、好める事あらば、遠慮無く申し出でよと申しけり。さよ女は、忝なきよしを云ひて、さらば、夜分なご、用事の透に、手習ひ學問を敎へたまはれと云ふに、主人いよ〳〵感じて、書物や、筆墨紙を與へて習はしむるに、これほど、心がけよき者なれば、思ひの外に上達して、二三年の間に、四書孝經等をも讀みて、ほゞ其義を解するに至り、手跡も見事に書くやうに成りぬ。主の妻もいとほしがりて、琴彈くわざをも敎へしに、これも亦、器用の質にて、ゆるし受くるまで成りにけり。一日、さよ女は、主婦にむかひて、申すやう、

私が、御當家様へ上りました時は、やつと、いろはをにじり書きする位で御座りましたに、御主人様の御情で、かつ〳〵文字をも讀み習ひ、琴彈く事さへ覺えました、御高恩を思ひますれば、せめて、長く御奉公を致しまして、心一杯御恩報じも致したいので御座ります。宅で、殊に、義理ある父は、段々取る年で、いよ〳〵勞働も、骨が折れる容子で御座りますから、御殘り惜しうは御座りますれど、今年は、御暇を頂戴して、父母のもとへ還り、心ばかりの孝養が致たう御座ります。まことに勝手がましう御座りますが餘義無き、さよが願ひを、單へに、御聞き入れ下ださるやう、何卒、奥様から、宜きやうに、旦那様へ御取りなし下だされませ。

涙ながらに申しければ、主婦もそゞろに感涙を催し、

汝は實に感心な女兒だよ。汝のやうな小間使は、中々澤山ありはしないから、何時までも使ひたいと思ふけれど、左様聞いては、本當に無理にとめる譯にも往かぬから、能く、旦那様へも申し上げて、代りの來次第下げる事にしよう。

主婦は、斯く懇ろに云ひ渡し、金子品物等、手厚く、さよ女に與へて、首尾よく暇をとらせけり。扨後は、さよ女、父母を助けて、立ち働き、其上、習ひ覺えし業により、生活の足にもなさんと、先づ手習ひの師となり、近所の小供に授けくるに、孰れも進歩著るしかりければ、追々に弟子も殖えけるにぞ、頓て、讀書、彈琴などをも教へて、女の道を說き聞かせければ、この家に出入する女兒は、みな、品行正しく成りにけり。さるからに、さよが孝行の評判高く成り行き、女

兒持てる親達は、我が子にも、見習はせて、善き人にせんと、遠方より、來たりて、其教へを請ふに至りけれども、さよ女は少しも、慢じたるやうの容子無く、ます〳〵謹みて、父母に事へ、家計段々豐かになりては、親達が衣食にも事缺かせず。稀には、保養にも伴なふ迄なりにしを深く悅び勇みぬ。されど自らは、更に人並に、遊び樂しむ事も無ければ、兩親は言ふに及ばず。近隣の人も、感心して、これが爲に婿を世話せん、

嫁に貰はんと言ふ者あれども、さては、父母の孝行疎そかになるべしと、固く辭して諾せざりけり。この事、遂に公けに聞えて、寛政三年三月、時の町奉行小田切土佐守より、銀若干を賜ひて、其孝行を旌されき。

さよ女、卑賤の家に生れて、能く、下劣の惡習に染まず。身、武門の家に事ふるに及び、進みて、學問技藝を學び、更に父母のもとに還り、

近隣の女兒を教へて、婦道を知らしめ、學藝を學ばしめ、終生、己れが幸福を犧牲にして、能く義父と生母とに事へたる、まことに、甚じき孝子の行ひと言ふべし。

○古部の登利女

登利女は、三河國額田郡古部村なる、小農の女なり。家極めて、貧困なれば、登利が、齢十二三歳に及べる頃より、人に雇はれて、僅かの賃錢を得、これを以て、朝夕の烟を助けくるが、父、ゆくりなくも、重き病に罹りて、病牀に打ち伏しければ、登利女が辛苦幾層を重ねて、今は、他人に雇はれつゝ、家を出づる事さへ難く成りにけり。さてしも、病む人の傍らにのみ居て、看護せらるべき家計ならねば、朝はまだきより起き出でゝ、食物、藥何くれと取り揃へ置き、遠く山林に入りて、薪を伐り、これを束ね負ひて岡崎の市にひさぎ、其料を以て、父が療料にあてしが、古部より、岡崎までは、三里に餘る行程なるに、登利女妙齢の身をもて、更に形を顧ることも無く、恰かも、山猿のごときさまして、重荷を負ひつゝ、行き還るいちじさは、壯年の男子も往々舌を卷く程なりきこそ。しかのみならず、父が治療を請ひける醫者は、地鯉鮒に住まひ居り、其所までは、七里に餘れども、朝出でゝ、其日に歸りつきけり。人々、この有樣を見て、

ごうも、おまへ樣の働きには驚きます。然し地鯉鮒へ日還りして、而して、其晩にも内職をなさるさうだが、其れでは體が續くまい。ちつと、氣をつけて、餘り無理をなさらぬ方が宜からうよ。

と云ひけるに、登利女は答へて、

御親切さまに有難う御座ります。然し、私は、小さい時から、遠路に馴れてますせいか、地鯉鮒ぐらゐへまゐりましても、餘り勞れは致しませぬ。結句、宜い心持ですから、どうぞ、御安心下ださりませ。又、阿爺の看病なごは、一向手もかゝりませぬので、無理する所では無くて、我儘ばかり致して居ります。くれ〳〵御案じ下だされぬやうに、

と、少しも誇りがましき容子も無きに、この言ひつる人々は、ます〳〵、登利女が心だてに感心しけり。斯くて、寒暑の衣服、食物、藥用等にも、少しも、父母に事缺かせず。惡きながらにも、時々の物をばすゝめけれども、いかにしても、衾こ蚊帳こは購ふだけの金錢なきまゝに、登利女は、夏の始め、柔らかき草を苅り、これを干して、槌にて打ち、其れを冬の衾に代へ、尙其身もて、父母の體を代るゞ

暖めて曉に達し、夏はまた、棕梠の葉を編みて、團扇を作り、其れにて、終夜、蚊を追ひ、父母をして、安眠せしむるなど、殆ど、いにしへの孝子の傳に在りしにも增りて、いとまめ〳〵しく事へけり。斯くて、長き歲月一日のごとく、孝養怠り無かりければ、此事、領主に聞えて、深く其行ひを賞賛せられ、毎年、三人扶持を、登利女が家に下だされけり。登利女は、その賜物を得て、大いに驚き且つかしこみ、

子が親につくすのは、當然の事だのに、御上から、斯樣な、頂戴物を致しては、まことに恐れ入ります。

只管に恐れ愼みて、ます〳〵孝行を勵みけるが、領主の程無く逝去せられしよしを聞き、其後は、登利女、其忌日毎に、御墓に詣でゝ、香華を奉りけるにぞ、人皆、其精忠を感歎しけり。其後、領主より、更に、登利女が父の嘗て、質入れせし山林を受け出だして、登利女に

賜ひ、其至孝を、世に旌されぬ。これを見もし、傳へもして聞きける者、げに、德は孤ならずこそありけれと、語りづきつゝ、感じあひけるとなり。

○中田多津女

多津女は、土佐國吾川郡伊野村の百姓、中田幾三郎が女なり。多津女十一歳といふ年、父母ともに、重き病に打ち臥して、枕あがらず。其上、六歳の弟のあるあり。且つ、父は病の爲に、いたく食を貪り、若し、意に適はざれば、忽ちに怒り狂ひて、食器を抛ちなごしけり。されども、多津女は、少しも難義なる氣色を見せず。靜かに、病父を宥めて、なるべく、心に適ふやうなる物を、まゐらせんと務むること、大人も及ばぬ行ひなりき。或時、父は例の如く、食の、己が欲する、物ならずして、疳を起し、

エ、、此樣な物が食はれるものか。汝は己が欲しいといふ物を一寸ともくれない。……入らぬは。……エ、忌〻しい。

膳を取つてはつと抛げぬ。多津女は、怒れる父の前に手をつきて、

阿爺、ごうぞ、御免なされませ。私が惡う御座りました。實は、此村中探したけれど、御好な品が無いので、つひ、上げる事が出來なかつたのです。今から、隣村まで、走つて往つて來ますから、御待せなさつて下ださい。……阿母、少しの間、お願ひ申します。……汝、大人しうしてお出でよ。

と母と弟とに挨拶して、一散に走せ去りけり。幾程も無くて、息せき還りし少女は、さも嬉しげに、

阿爺、お好な物はありましたよ。……隣村に、……今直に上げ

ますから、少し御待下だされや。

さも嬉しげに、父の好める食物、取り整へて、薦むれば、さすが短氣の病人も、忽ちに氣色なほりて、打ち悅びつゝ箸を取り、

ア、甘い〳〵、實に甘ひ。……多津や、能う遠方まで、往て來てくれたの。

父が笑顏は、孝女の爲には、千萬金の賜物にも增して、無上の滿足を覺ゆるなり。

阿爺、御口に適ひましたか。オ、嬉しい。

斯くて、しばしと憩ふ間も無く、又、母にむかひて、

阿母、サア、手が透きましたから、お擦りでも致しませう。

母は、枕をもたげて、

汝、さぞ、草臥れたであらう。ちつとお休みよ。

多津女は頭をふりて、

イ、エ、ちつとも、サ、少し擦りませう。

少女は、斯くの如く、つゆの暇も無きまで、立ち働けども、幼少の弟は、手助けは扨措き、この憐れなる姉を苦しむることのみなりき。そはこの小弟は、體質極めて、虛弱にして、疳癖最も强く、何事をか腹立ちて、泣きむづかる時は、姉の多津女、いかに、宥めすかせども、更に聞き入るゝ事無く、ます〳〵、泣き叫ぶに、父は、病牀に在りて、うるさし、やかましと怒る故に、右左に心をいためて、一人困難の位置に立つ、少女が上こそいとほしけれ。されど、多津女が孝養、其甲斐ありて、父の病は年を超えて怠りぬ。今よりは、花咲く春をも待ちつけてましと悅ぶ程も無く、些細の事の行違ひより、父は遂に、罪人となりて、獄舍に繫がるゝ身となりけり。是れを見て、やゝ

快方に趣きける、母の病は再び重り、家財は、日々に乏しく成りぬ。多津女は、父と母とを案じ煩ひて、憂へもだえけれども、亦いかにともすべきやう無かりければ、遂に、心を決して、縣廳に訴へ出でて云ふやう、

私の父が、御上の御法を犯しまして、罪科に處せられました事は、まことに恐れ入ります次第で、何とも申し上げやうも御座りませぬが、家には、大病の母と、虚弱の弟とが居ります。私は、一生懸命に働きましても、兎ても養ふ事が出來ませぬゆゑ、どうぞ、父の代りに、私を徒刑になされて、父を御免し下ださりませ。左樣致しますれば、三人の者が助かります。御難題で御座りませうが、どうぞ、私の願ひをおかなへ下ださりませ。

云ひ果てゝ、よゝと泣き伏したるさまを見ては、役人もそぞろに袖を濡しけるが、さてしも、少女の願意の、聞き屆けらるべきにあらねば、さま〳〵に說諭して歸しけり。斯くても、多津女は、あきちめず、二度も三度も、書狀を以て、父の罪に代はらんと請ひけり。役人達も餘りに憫然の事に思ひ、且つ、幾三郎も、大罪を犯したりと云ふにもあらねば、出來得るがきりの減刑を評議して、程無く放免せられければ、多津女は、天に悅び、地に悅び、深く、公けの仁德に感じて、ます〳〵孝行を勵みけるにぞ、縣廳には、大いに、其善行を賞揚ありて、金千匹を賜ひけるとぞ。げに有難き事なりかし。

むかし、支那漢の代、文帝治世の頃、緹縈といふ、齡十四歳なりける少女の父が罪に代はらんと云ひけるよしは、彼の國の列女傳に見えて、世にも稀なる孝烈の行ひなりと、多くの書にも褒め稱へ

たりけるが、今また、我が明治の御世に、斯かる孝女の出で來たること、嬉しくも畏き例しなりけり。法は、濫りに、曲げうべきものならねど、情狀を斟酌せらるゝ、公けの仁惠、亦、右樣の所には施さるゝ事もあれば、人は勉めて、善き道を履まゝ欲しくこそ。

二　主君に忠義なりし少女

○奥州の采女

葛城王、奥州の政治民情視察の爲に、下向ありけるに、(王は、欽明天皇の皇子なり)國の守、御設けのさま、いと疎そかなりとて、王の御機嫌宜しからず。直ちに、都へ還り登り給はんとせられたりけるに、其女の采女、(采女は、國郡より、貢して、年限を定め、朝廷の下婢にまゐらする所の少女の名稱なり。此少女も、采女の役を勤め終つて、國へ還りなゝごしたる者なるべし)これを見て、いたく畏こみ、自ら土器を取りて、王に御酒を勸めまつり、

淺香山影さへ見ゆる山の井の淺くも

主君に忠義なりし少女

人を我が
思はなく
に

と云ふ歌を詠みて、謠ひ上げくれば、王忽ちに御心解けて、守の無禮をゆるし給ひ、御機嫌うるはしく還御成りにけるこそ。淺香山の歌の心は、淺香山の影さへ移りて見ゆる、山の井の水のやうに、淺くは、殿下を、我れ〳〵が思ひたるにはあらぬを。何が思召しに適はずして、御不興氣に、還御を急がせ給ふぞ　この意にて、何は無くとも、今一つ、聞し召せと、御酒を勸め奉りし采女が

容子の、いかにも、王を懷しみ、尊び奉る、心詞の、能く王を動かしまゐらせしなり。この少女無かりせば、國の守は、不臣の罪にあてられて、酷き目にも遇ひやしけん。されば、采女が、大君に對し奉る忠實は、また父に對しては、孝行となりにけるなり。げにや、忠臣を求むるには、孝子の門に於てせよとも言ひけらし。年若き女子には、いと有難き心行ひにこそありけれ。

○堀部順女

順女は、赤穗の義士、堀部彌兵衞金丸の女なり。はじめ、彌兵衞、江戸、牛込の、高田馬場を通りけるに、年まだ若き一人の武士、許多の人を相手に鬪ひけるが、須臾にして、相手をこと〴〵く斬り殺しぬ。彌兵衞、其手並に感じて、しづ〳〵と、武士の傍に歩み寄り、

見受け申せば、まだお年若の御仁と思はれるに、天晴の御手並、失禮ながら、感じ入つた。……然し、何故に、かく多くの人をお殺し成されたのですか

と問ひければ、彼の若き武士は、ゑづかに刀の血潮を拭ひ、鞘にをさめて、恭しく、禮をかへし、

御賞美に預りまして、甚だ赤面仕る。實は、恩義深かりし、叔父の仇打を致したる、安兵衛と申す者で御座る。

と答へければ、彌兵衛ます〳〵感服して、先づ兎も角もと、我が家へ伴なひ還り、我れに幸ひ一女あり。抂げて御身が妻とせられよとて、爰に婿舅のちなみを結び、遂に當家の養子となりにける。然るに、彌兵衛父子は江戸詰と成りて、府下に住まひける程、ゆくり無くも、殿中刄傷の事起りて、主君淺野内匠頭には、切腹致され、同家は斷絶の悲境に陥りぬ。されば、忠義の志し堅き四十七士の銘々、思ひ〳〵に身をやつして、主君の仇を報ぜんと企つる中に、この堀部父子も加はりたり。彌兵衛の妻は早世し、其母正僧尼といふが、猶世に在りしが、かねて、賢母の聞え高き人なりければ、我が孫女の心を勵まさんとて、今年、僅かに十四年になりたる順といふ少女を、膝下に招き寄せ、

のう、於順、おまへは、此度、御主樣の御家の大事が起つたので、御家中の衆も、これからは、散々ばら〳〵になるであらう。若し、かやうな事が無かつたならば、おまへの許婚の夫、安兵衛殿も、來年は、歸らるゝであらうから、早速、婚禮もさせてと思うたのに、世はすべて夢、……ア、今更に何と言うても還らぬ事、それであるから、今よりは、兩人ともに、江戸にもおいで

あるまい。いかに、おまへは、江戸表へまゐつて、夫安兵衞殿に一目遇いたいと思ふか。

順女は、此頃より噂さに聞く、御家の大變、其れ思はぬにあらねど、第一に心にかゝるは、父の上、又、未來の夫の上、今遇はずは、生きて此世に復た遇ふよしのあるべきかと、思ひ續け〳〵し、今日しも、嬉しき祖母の詞、よしや、うたゝ寐の夢ばかりなりとも、戀しき其人に遇ふ機會を、祖母君の考へ出で給ふにかと、打ち騷ぐ胸をおさへ、打ちふるふ聲を低うして、

祖母樣、……ごうぞ、遇はせて下ださりませ。たつた一目なりとも、

裏恥かしさを堪らへて、差しうつぶきたるに、祖母は俄かに、氣色を變へて、

於順ッ、サ、安兵衞殿に遇ひたくば、遇はして上げう。

言ひざま立ち上りて、簞笥の引出しより、一振の懷劍を取り出だし、鞘を拂ひて、孫女が前に突きつけ。

安兵衞殿を一目見たくば、おまへの體は行くに及ばぬ。おまへの眼だけ行けばよい。サ。其眼をくり拔いて、早飛脚の、江戸表へ下だる便宜に誂へて遣りませう。

じりく〳〵と詰め寄れば、順女は　あなや　と叫びて疊に手をつかへぬ。祖母は再び聲を勵まし、

おまへも、武士の女じや無いか。祖母は、日頃から、何と申し聞かせた。この期に及びて、我が子と孫子息とに望む事は、外では無い。唯一日も早う、お主の讐討つて、死手の御供に後れぬやうに、……最早、死こいふものより外に無かるべき筈の夫

に、女が遇うて何とする。……いや〳〵、遇ひたうは御座りませぬ。ごうぞ一日も早く、仇討の吉報が聞きたう御座るとなぜ言はぬ。其樣な雌々しいおまへなどが、此世に殘つて居ては、父御も、夫も、嘸心が引かれう。自分が出來ずば、祖母が手に、と、懷劍を取り直す、其手をさゝへて、順女は涙の聲を絞り。

祖母樣、私が惡う御座りました。もう決して、遇ひたいなどゝは思ひませぬ。ごうぞお免し下ださりませ。屹度で御座ります。

祖母は、なほ、念をおして、然らば、是れよりは、總大將たるべき、大石殿の指揮を待つべしと申し渡しぬ。祖母は、義士復讐の翌年、八十九歳にして死せり。斯くて後、大石良雄が計畧にて、讐吉良上野介が奥へ、淺野家藩士の女子七人迄、女中として、住み込ませぬ。順女も、其中の一人に撰ばれて、至りしが、義士打入の夜、六人の女子は、みな刄に伏してみまかりけれども、順女は、大石が密使を受け、父が家に行きて宿泊しける夜なりければ、遂に、六女と最後をともにすること能はず。よりて、母がたの叔父なる、長崎泰德寺の蕭山和尚のもとに行き、剃髪して尼にならん事を請ひけり。然れども、蕭山は敢てこれを承知せず。御身の如き、美貌ありて、妙齡の女子は、到底、道に入ること能はざるものなり。若し、其れにても志し動かずとならば、我が云ふまゝに任すべしとて、一室に幽閉すること、三年に及びけれども、順女は、更に悲しめる氣色も無く、ますます愼みて、節を守ること堅かりければ、蕭山も、今は心落ち居て、頓て順女に剃髪をゆるし、法號を、妙海尼と授けぬ。尼、時に年十九歳なりき。斯く容を變へたれども、天然の美貌は、中々に凄く氣高く、

つゆ衰ふるさまも無かりければ、妙海憂き事に思ひて、常に墨を面てに塗りつけ、破れたる法衣を着、恰かも、男法師の如く粧ひ、瓢然として、泰德寺を立ち出で、義士が菩提の爲にとて、諸國の靈場を巡禮しけるが、ゆき〳〵て、長門の國に到りける時、大病にかゝりて、既に危篤に及びければ、旅店の主人、尼が枕邊に近づき、

若し〳〵、尼樣、貴婦の御病氣は大分重いと、醫者樣が言はれます故、萬一の事があると困りますから、何卒御旅券を拜見致したいものです。

尼は僅かに重き枕をもたげて、

ア、いや、私の旅券は、御當地の領主か、さうで無くば、御重役より外に、お見せ申す事は出來ませぬ。

と言へば、主人困りて、

左樣言はずに見せて下ださい。御法ですから、強ひて請へども、尼は更に承知せず。

お氣の毒ですが、どうも、御主人の詞に從ふ事は出來ませぬ。

きつぱりと言ひ切りたる、容子、病苦に精神も亂れぬ、天晴のふるまひ、何樣これは尋常の尼法師にてはあるまじと、主人も思ひて、竊かに、懇意の藩士に就きて、事のよしを語りけるに、このこと、早速領主の耳に入り、さらば、かう〳〵せよとて、近習の臣二人に、醫師一人を差し添へて、其旅店へ遣はされけるまゝに、尼もつひに實を告げゝり。領主これを聞きて、大いに驚き、さては、音に聞えたる、赤穗の義士が一味の烈婦なりしか。わが領内に於て、手當疎そかなりと言はれては、世の批判もいかゞあらんとて、看護人、醫師など添へて、いと丁寧に扱はれたりき。一日、尼は、看護人にむかひ

て、

私の頭陀嚢を開けて下さい。

と頼みければ、看護人、直ちに、頭陀嚢を、尼が傍りに持ち行ゆて、打ち開けば、中より多くの黄金出でたり。看護人怪しみて、

ア、尼様は、どうして、こんなに、大金を所持して入らつしやのる。……ヱ、どうしたんです。

尼は問はれて苦しき息をつき、

私は、江戸表へまゐつて、志願の事を遂げたい爲に、今日迄貯へて置いたけれど、この容子ではとても助かるまいと思ふ。もとより佛に捧げた身ですから、死ぬる命は惜くも何とも無いけれども、念願が通らぬ中に死ぬかと思ふと、實に殘念でたまらないんです。

息も切れ〳〵に言ひて、涙をはら〳〵と流したりしが、又しばらくして、

私が死んたならば、此お金は、みんな、高輪の泉岳寺へ納めて、淺野様の御菩提を吊らつて下ださるやう、お取計らひ下ださい。

と願ひければ、看護人は、早速此由を領主に申し、領主も、いと憐れにおぼして、正に頼みの趣きは果たすべしと、承知せられぬ(此金は、大石良雄が遺はしたるを、其儘に貯へ置けるなりとぞ)されど、尼は不思議にも、この大病を凌ぎて、幸ひにも本復したりしかば、領主へは、厚き惠みの悦びを聞え上げ、再び笈を負ひて江戸へ下だりぬ。妙海は、いかにもして、舊主淺野家再興の事を、將軍へ願はんと、さま〳〵に其方法を考へけれど、兎ても尋常の事にては、

其志しを達し得べくもあらず。兎やせん角やせんと、思ひ屈しつるが、遂に意を決して、老中が登城の砌、兩度まで直訴しけり。(直訴とは、其達せんと欲する人の駕に近づき、願書を投げ入るゝなり。其筋の手續きを經てなすにあらざるが故に、必ず、直訴せし人は罪を得るなり)始めの時は、狂人と言ひなして、公けにも、事無く免されたれど、再度に及びては詮方無く、妙海は、法の如く、獄に繫がれき。されど、人皆、其志しをあはれみ、さまゝに取りなして、程無く、自由の身とせられぬ。斯くて、有司達は妙海にむかひ、汝が、主家を思ふ心は、尤もの次第なれど、到底、上には、法をまげて、淺野家を再興せさせ給はん事の出來るべきにあらねば、斷念して、此上、上に煩ひをかけ奉るまじ。と懇ろに諭されければ、尼も、今はこれまでこや思ひけん。全く浮世の事は思ひ捨てゝ、泉岳寺なる、舊君及び義士が墓の側らに庵を結び、其所に閉ぢ籠りて、其冥福を祈るより外の事無かりき。斯くて、尼は、九十一の高齢をたもち、天壽を以て、安らかに永き眠りに就きけりとぞ。

尼は、年少の時より、主家の難に遇ひて、さすらへの身と成りしなれば、學問する暇とてもあらざりしかど、天性、器用のたちにて、又殊に物覺えよく、一度見聞きしたる事は忘れず、和歌もよくしたりと云へり。さて、出家の後は、深く佛學に心を委ねて、斯道に尋ね入り、多くの經論等をも讀誦したるよし傳ふ。

尼、國難に遇ひて、一家こゝ〳〵く、命を致したる中に、一人生き殘りて、百折屈まず。しば〳〵主家の再興をはかれり。よし、其事成らざるも、其志しの堅固なる、丈夫も及ばざる者あり。尼の如きは、實に忠烈無比の女丈夫といふべし。

○松田さつ女

爰に今、少女さつが忠烈の行ひを記さんとするに當りては、先づ其主の事より認めざる可らず。

石見國濱田の城主、松平周防守康豐の夫人は、龜井隱岐守が女なり。其里附の老女澤野といふ人、齡六十に達して、猶健やかに萬づに拔目無き女なりしが、心ざま正しからず。年長くるに從ひて、いとゞ意地惡く成り增りぬれば、奥向の女中共、其れが爲に困しめらるゝこと大方ならざりしかども、夫人が幼き頃より、附き居たる者とて、誰れも憚りて、そを惡ざまに言ふ人も無ければ、澤野は、いたく、我意に募りて、心のまゝにぞ振舞ひける。然るに、同じ夫人の側女中に、みちといふ人あり。こはまた、其性すなほに温しく、何くれの技藝にも秀でたりければ、夫人は深く、おみちを愛して、傍ら去らず召し使はれぬ。頃は、享保九年四月の始めつ方、夫人は子規の初音に催されて、

誰ぞ。みちを呼びて、琴など調べさせヱ。

とありければ、小性某畏こまりて、みち女が部屋に走り行き、

おみち樣召します、早う〳〵

呼び立てられ、今、部屋方(奥女中が召使ひの女を部屋方といふ)さつに髮結はせ居たりしみちは、

ハイ、唯今直に

とて、急ぎ仕度整へ、廊下に出でゝ、我が上草履を求めけるに、いかにしたりけん。更に見えず、さつも氣を揉みて、其所此所と尋ねまどひける程、又重ねての召とあるに、心惚たゝしきみち女は、已む

を得ずして、あたりに在りける他の上草履引き掛けて、使ひこゝもに走り行きけり。さて、御前に出でゝ、夫人が所望の琴を奏しけるに、夫人はいたく興に入りて、首尾いと愛たく、其坐を退きぬ。斯くて、みち女は、我が部屋に還らんとて、もこの廊下へ出でける時、老女澤野は高聲に、

誰れじや〳〵、……私の上草履を斷りも無く、穿いて往つた人は誰れじや

と罵ちるゝに、みち女は驚き、其所へ走り出でゝ、丁寧に手をつかへ

俄かの御召に心が迫きまして、つひ御局様の御草履とも心づかず穿きました段、重々恐れ入ります。……ごうぞ、御免し遊ばして下さりませ。

上草履を取り直して、恭々しく局が前へ揃へければ、澤野はじろりと、これを睨みて冷笑ひ、

オホヽヽハヽヽヽ、人の草履を默つて穿いて置いて、見咎められてから、心づかなかつたから、免してくれと、宜うも〳〵、其様な蟲の宜い事が言はれたもの、其方も武士の娘じや。いやさ。武家の御奥へ御奉公するからには、武家の作法は知らねばならぬ筈、……日頃から發明な其方、よも知らいでしたことは言はれまい。大方、私を老耄じやと見くびつてぐあらう。是れが男なりや。刀に掛けて、たゞでは濟まされぬ所、……アヽもう戻かしい。……其方の穿き穢した草履は入らぬ。其方に進ぜう。

言ひさま、はたと蹶かへして、後をも見ずして、しづ〳〵と、奥殿さ

して入りにけり。澤野が蹶つけし草履は端無くも、みち女が横顔に當りて遠く廊下の板敷に飛びぬ。みち女は、口惜し涙に咽びて、あばし其方を見送りたりしが、斯くてあるべきにもあらねば、悄然として、部屋に還り、少し氣分悪ければとて、衾引き被ぎて伏したれども、もとより眠らるべくもあらねば、時々に溜息をつきつゝ、身動ぎたるを、さつは怪しみ思ひて、心をつけて見れば、みち女が顔の色たゞならず。眼の中もうるみて見えけるにぞ、何事のありしにかと問へば、實はかやう〳〵と草履のあらましを告げ、

さつ、實に殘念じや。無念じや。察してくれ。

さつはわざと落ちつきたる體を粧ひ、

何事かと存じましたら、左樣な事で御座りますか。……何貴婦、そんな事はいくらも有るので、……其れに、御局樣の御意地の悪い事は、誰れも存じて居ります。決して〳〵御心におかけ遊ばしますな。……マア、其れよりも、お氣晴しに御酒など一つ召しあがりませ。

みち女と、さつと主從さし對ひに、四方八方の物語、機嫌よく、夜を更かしけるに、みち女は、所藏の小袖と帯とを取り出だして、

さつや。おまへが、今に始めぬ親切を、しみ〴〵嬉しく思ふぞエ。いつか、上げよう〳〵と思うて居たが、折も無かつたから、つひ、延び〳〵になつて居たの。……アノこれは、用ひふるした衣類ごうぞ貰つて置いておくれ。

さつは、優しき主の詞に感涙を催して、

召使ひが、御主の御爲を思ふのは、別に珍らしい事では御座りませぬものを、左樣に被爲仰つて戴くさへあるに、身に餘

つた頂戴物は、何こも恐れ入ますけれども、折角の厚い思召しで御座りますから、有難く戴いて置きます。

斯くて、翌朝は、みち女も、早く起きて、さつを呼び、

さつ。……太儀ながら、此文と手箱とを、矢の倉まで、持つて往つておくれ。

矢の倉には、みち女の兩親の住まへるなり。さつは、これを受けて、畏こまりました。

こ仕度取り急ぎて、屋敷を出で、日比谷門のほとり迄行きけるが、頻りに胸打ち騷ぎ、心地惡くなりて、一歩も進むことかなはねば、立ちこまりて案ずるに、昨夜お主が人の命は、はかないもので、今日ありて明日を知らず。まことに、老少不定なれば、何時、ごう言ふ事があらうもわからぬと仰せられたが、若しや、御短慮の思召し立ちでも、あつたのではあるまいか。斯う思ひては、最早、先へ進むべき氣力も無く、いとゞ胸のみ騷がるれば、急ぎ踵を廻らして、もとの屋敷へ立ち戻り、みち女が部屋の襖障子、引き明け、屏風の中をさしのぞけば、こは如何に、みち女が身には白無垢を着し、襟には、水晶の數珠を掛け、机の上には、普門品を開け、香を焚き、其前にて、見事に、自殺して伏したり。さつ、其狀を見て、あつと叫びつゝ、轉ぶが如く、主の亡體に身を抛げて、

御主樣、おみち樣、なぜ、此樣な、御短慮を遊ばして下さりました。又是れ程に思召したなら、なぜ、このさつに爲被仰つては、下さりませぬ。さつは、言ひがひ無い者と、御見捨て被成れましたので御座りますか。御恨めしう存じます。

こ袖を嚙み、聲を忍びて、泣き崩をれしが、やゝありて、

嗚呼々々、泣いて居る所では無い。……この口惜しい、御主様の御生害も、もとはと言へば、あの意地悪の澤野目がしわざ。オヽ、左様じゃ。……讐々讐を打たいで措かうか。

遺恨の眦に朱をそゝぎて、屹と局が部屋の方を打ちまもりしが、思ひ定むる所や有りけん。忽ちに、莞爾と冷やかに打ち笑みて、惚たゞしく、澤野の許に走り往き、

お局様々々、大變で御座ります。おみち様が、アヽ氣絶なされて、ごうしても、氣がつきませぬ。畏れながら、ごうぞ、早う御出下されませ。

澤野は、今、すわと呼べる部屋方を叱りてありけるが、例の意地悪さうな眼に、おろ〳〵ときさつが容子を見て、

何じや。大層な。またいつもの癪が起つたのでがなあらう。

主君に忠義なりし少女

……醫者なと呼んで見せたがよい。

さつはます〳〵迫き込み、

でも、もう、生體は御座りませぬ。ごうぞ〳〵、御局様、御出遊ばしまして、御覽下さりまするやう、一重にお願ひ申します。

澤　其れでは往かずばなるまい。……久、供しや。

久と言へる部屋方を引き連れ、さつが案内にて、おみちが居間の屏風の中へ入らんとする時、さつは、摺り拔け、

御免遊ばしませ。

と言ひながら、つと、主人が亡體のほとりに落ちたる、懷劍を拾ひ取り、

澤野、主人の讐覺悟しや。

聲諸共に、澤野が左の脇腹ぐさと刺す。急所の重傷にしばしもたまらず。あと叫びて、倒るゝ所に、さつはのしかゝりて、ゑつかと抑へ、

汝、澤野昨日は、能くも〳〵、わが主を辱かしめをつたな。汝が、武士の娘ならば、恥を知る筈じやと言うて、草履を顏に蹴つけたによつて、主のおみち樣は、是れこの通り、自害して、お果てなされた。我れも、武士の娘なれば、主人の讐を取つて、修羅の妄執をお晴らし申すのじや。觀念して成佛せよ。

言ひさま、懷劍を取り直して、澤野が喉元を、二刺三刺々し貫きけり。供に立ちし、久、後れて來たりしさわは、此有樣に腰を拔して、たゞ、ふるへ聲に、

大變々々、……誰れか早く〳〵

と呼び立つるのみなり。此物音に驚きて、馳せ集まりたる、女中達、

先づ奥家老、堀次郎大夫、奥目附小池利右衞門に告げくれば、直ちに來たりて、さつに對ひ、事のやうを問ひけるに、さつは臆めたる氣色無く、始め終りを、順序よく述べつくして、

お主の爲とは言へ。人を殺した事で御座りますれば、御法通りの刑にお當て下さりますやう。

まだうら若き少女の、斯かる大事を爲遂たるに似げ無く、恭しく愼める色面てに顯れて、首を低れ、手をつかえたるさまに、役人もそぞろに感涙を催しけり。斯くて、大目附、奥家老、更に立ち合ひて、みち女が檢死も濟み、久、さわ、の兩女よりも、口供を取り、さつには汝は何分の沙汰あるまでこて番人をつけ置き愼みて命を待つべし。然れども主の讐を打ちつる段、上にも神妙に思召すらんとありて、番人等には、能く懇ろに取り扱ふべきよしを掟てぬ。さて又、みち女が、父母へ送れる書狀、手箱は、役人立ち合ひの上披き見るに、手箱の中には、形見とおぼしき品々、兩親と兄弟とに在り。其文には、父母に先立つ不孝のわびより始めて、年頃の恩を謝し、兄弟の者も、我れに代りて、兩親に孝養すべきよしを諭し、女ながらも武門の意地、辱かしめを受けし身にしあれば、生きて再び、人に面てを合はし難きまゝに自害して、果つる旨を細々と書きたるぞあはれなる。其後澤野が弟を呼び出だされ、姉澤野事、重き役目を勤めながら、不道の行ひありしにより、人を害めて、且つ、其召使ひの爲に命を落したる條、不屆至極に思召さるれば、其取米什器衣服一切闕所申しつくる。(闕所とは所有品一切を、官に召し上げらるゝなり)又、さつは、主人の讐を打ちつるなれば、以來、毛頭意趣ある可らざる旨の一札を記し、これに調印せしむる事とし、さつ

は、年少女子の身を以て、能く主人の讐を復し、其辱しめを雪ぎつる段、神妙なりとありて、改めて中老に召し出だし、切米四十俵五人扶持別に引越料、金百圓を下だし賜へる旨、周防守より、父助八へ申し渡されければ、（さつが父、松田助八は、毛利甲斐守が家臣にして小人組頭役を勤むる、小臣の者なり）父母も、當人も、深く其恩澤を畏こみけれども、到底、さる重き職を受けん事覺束なしと、再三辭退に及びぬ。されど、守は更に、聞き入るべくもあらず。猶再應の使ひ來たりて、速かに御受すべきよしを促しけるにより、さつ、今は辭するによし無くて、御受に及びぬ。又、みち女の父は女が爲に讐を打ち、辱しめを淨められたるさつは、何卒我が養女として、亡き女が形見とも見、長く其恩に報じたしと、是れまで、しば〳〵申入れければ、双方相談の上、其事に決しぬ。斯くて松尾が廿七歳

といふ、年、用人神尾某、其忠貞を嘉みし守に請ひて、妻となし、子孫繁榮して、樂しき世を送りけるこそ。いとも愛たき物語りなりけり。

さつ、少女の身を以て、他を殺害せしが如き、荒々しきふるまひは、もとより、文明の世に在りては、假令、其事柄の、忠孝節義の已むを得ざるに出づるなりとも、濫りに習ふべき事ならぬは、言ふも更なり。されど、さつは、武家執政時代に生れて、君父の復讐は最も、尚武の氣象を養ふによき鑑とせし頃の事なれば、まことに、嘉すべき行爲にぞある。斯かれば、其行ひは、今さながらに、習ふべきにはあらぬも、其志しは猶慕ひ尊ぶべきにこそ。

○備前のもん女

もん女は、備前國、松平内藏頭が領分の者なり。父は其藩の小臣者にして、家極めて貧しかりければ、もん女七歳の時より、重役若原監物の奥に召使はれき。然るに、主の監物は、享保の頃、故ありて、松平家を暇を請ひて立退き、流浪の身となりぬ。もん女は、其時廿歳ばかりなりしが、多くの婢僕は、みな思ひ〳〵に身の暇を請ひて、辭し去りけるに、もん女一人はとゞまりて、監物が養母と姉とに從ひて、京都にぞ落ちつきける。監物が、松平家に在りし時は、三千石を領して、何不足無き家なりしも、浮涙の身と成りては、何のなすことも無くて、貯へとても、日に月に殘り少なく成り行くのみなるを、もん女は、之を憂き事に思ひて、朝夕主の飲食起居何くれの世話も、一身に引き受けて、まめ〳〵しく立ち働くのみならず。己れが所有の衣服、髪飾りまで、賣り盡して、果ては、一品もとゞめざるに至るも、更に惜しげなる氣色も示さず。尋常の少女ならんには、櫛笄よ衣裳よと、協はぬ望みにも、氣を揉みて、憂き身をやつす年頃なるに、油氣も無きおごろの髪は、ふるびたる木櫛に無雜作に卷きつけられて、雜巾に似たる繼ぎはぎの布子、荒布に似たる、細き帶、見る影も無く衰へたれど、主を思ふ清き心は、雪よりなほ潔く、今日も、手もとの見ゆるまで、賃仕事に日を暮らし、夕かけて、いさゝかの菓子もとめて、兩女の主にまゐらせ、

御兩女樣ちと端近くお出かけ遊ばせ。餘り、一室にばかり引き込んで、いらしやること、お氣づまりで、お體もお惡うなりませう程に……サ、もんが、買うてまゐりました。お甘しいお菓子、入れたての新茶、お一つ召し上りませ。

いつもながら、さも氣輕にふるまひて、兩女が前へ恭しく押据ゑ

たる貧しき家に在りながら、昔にかはらぬ、禮儀の正しさを見るにも、兩人の主は涙なり。

いつに變らぬそちが親切、足らぬ中から、才覺して、私等の好な茶よ菓子よと勸めてくりやるゝ、嬉しう思ふ心は通り越して、却つて悲しい。……腑がひ無い主に使へて、そちに迄いかい苦勞させるのう。

老母が涙ながらの禮を、もん女は打ち消して。

アレまたあんな詰らぬ事仰しやります。私は一寸ども勞れは致しませぬ。其れに斯うして、御兩女樣のお悅び遊はしますお顏を拜見致しますのが、何より有難いので、……で御座いますけれども、まことに足らはぬ身である故に、思ふ萬一も、お悅ばせ申す事が出來ぬと思ふと、其れが何より殘念でざります。

後ろをむきてほろりと涙をこぼしぬ。兩女も貰ひ泣きして、ます〳〵この少女が忠誠に感じたりこそぞ。

斯くて老母は貧苦の中に沒し、監物が姉なる人も病がちに憂き年月を重ねたりしが、遂に若原は、再び松平家に歸參の事となり、姉もありし憂苦を昔に談る身となりぬ。されば、もん女にも若干の手當して、其妹の婿なる、伏見屋孫兵衞と言ふ者の家に同居さする事とこしけり。もん女は此所に安らかに一生を送りたりしが、舊主の位牌は、わが佛間に祭りて、沒する時も、姪某に香華を長く斷つましきよしを、くれ〳〵も遺言したりこそぞ。もん女は實に類ひ稀なる誠忠の女子といふべし。

○小松原の綱女

綱女は、酒井修理太夫が足輕、松見茂太夫の婢なり。父は、同領分の遠敷下中郡、小松原といふ所に住める、漁人角左衞門といふ者の娘なるが、家貧しければ、年少の頃より、松見がもとへ、子守奉公にやられぬ。されど、綱は、心ざま正しく、大人しく、常に、小主人を大切にして、敢て苟くもすること無かりき。綱女、十五歳に達しける年、いつもの如く、主の幼子を負ひて、屋敷裏の小道をたごり歩きたりけるに、一疋の病犬、猛然として、驅け來たり、牙を鳴らして、脊負へる小兒に飛びかゝらんとする一切刹、綱はあはやと叫びながら、最早、遁れ避くべき暇も無ければ、やにはに、小主を、脊より下ろし、大地に轉がし、自分は其上へ覆ひかゝり、身もて、病犬を防ぎぬ。

犬は、いよ〳〵猛りに猛りて、うゝと吠えつゝ、綱が體に嚙みつき、食ひ裂きける儘に、血は流れて幼兒の體さへ、朱に染みけれども、綱は少しも身を動かさず。たゞ悲鳴を上げて、

助けて〳〵〳〵

と呼びける程に、人々走り集まりて、やう〳〵、病犬を打ち殺し、小兒と綱とを助けて、松見が家に送り屆けぬ。然るに、小兒は少しも恙無くて、たゞ綱女は、數ヶ所の負傷に、精神も、殆んど錯亂れたれども、をり〳〵に口を開きて、

坊樣はどうして〳〵

と云ふに、有り合ふ人々、且つ感じ、且つ憐み、

坊は、おまへの御蔭で、薄疵も無いから、安心をし、

其聲を聞きて、綱は何事も言はず。打ちうなづきぬ。折節、父の角左

衞門は、漁業に出でゝ、家に在らず。留守せし母、其報を聞くと頓て、走りて、松見が家に至りしが、己れが女の安否は問はずして、

坊樣に、御怪我をさせは致しませんでしたか。……坊樣は何處に、坊樣は〳〵

と尋けるに、小兒は恙なくて、綱は斯う〳〵なりと、松見夫婦、涙を流して談りけるに、母は少しも悲しめる氣色無く、兩の手して、胸撫で下ろし、

嗚呼其れで安心致しました。大切の御主樣に御怪我をさせたら、どうしようと思ひました。

その有樣に、人々更に感歎して。

實に、この母にして、この子ありだ。武士は恥かしい。

なぞと言ひあへりける。後、數日にして、忠婢綱は、あたら莟の花の、

生先遙かなる齡にて、あはれや、重傷にたふれければ、領主も、そのよしを聞き、家中の者打ち集まりて、懇切に葬りすべき旨を掟て、父角左衞門には、金若干を賜ひ、同郡西澤村なる、西德寺に、其亡體を埋葬せしめ、石碑を建てゝ、跡懇ろ

に吊らはれけり。超えて、明和八年五月に至り、領主更に、其忠死をいたみ、且つ其義烈を嘉し、角左衛門が家には、代々の貢を免除せられきとぞ。

嗚呼、綱女年少の身を以て、能く主の命に代り、非命に死したるは、いと悼むべく、悲しむべき事なれども、其德の餘光、引きて、父母、子孫に及ぼし、令名、遠く世に傳はりて、臣たる者の鑑となりぬるを思へば、長命して、世にも人にも厭はれ捨てらるゝ、淺間しき、惡德の人に比べて、霄壤の差よりも尙遙かなるを覺ゆかし。古語に、身を殺して仁をなす　とは、これらの人をや言ふべからん。

○倉敷の多藝女

備中國、窪屋郡倉敷といふ所に、大橋久右衛門といふ者あり。其家に、多藝と呼べる、召使ひの女あり。この女、年少の時、或人の紹介によりて、來たり事へけるが、性質柔順にして、一度も、主の心に背きし事無く、たゞ一筋に、主家の爲とのみ精勤しければ、主人久右衛門も、善き婢を得たりと悅びて、いとをしみ使ひける程に、久右衛門、ふと病ひの床に就きて、藥治効無く、遂に空しく成りにけるより、若年の子息恒助其家督を相續しけるが、其頃より、家計次第々々に衰へ行きて、昔に變る貧婁の身と成りにけるを、恒助、憂き事に思ひわびて、歎きくらしける程に、淺間しくも、風癲病を發して、荒れ廻り狂ひ罵ること大方ならず。斯くては、いかなる椿事か、出で來なんとて、親族朋友相ひ謀りて、恒助を、一室の內に閉ぢ籠めぬ。さても、前代より召使ひつる婢僕は、皆、身の暇を請ひて、出で去りたる後迄、多藝は、猶一人殘りこゞまり居て、狂人の主人に事ふ

る事、ます〳〵謹めり。されば、狂人の、時々衣服、蒲團を食ひ裂き、又は、穢き物を蒔き散らしなどして、荒れ狂ふ事あるも、多藝女は、更に厭はしげなる容子も無く、又恐れたる氣色も見えず。丁寧に、靜かに、其始末をなし、懇ろに勞はり慰むるにぞ、狂人も、他の者よりも、多藝が爲す事は悅び、多藝が言ふことは、少しは聞きわくるさまなりきとぞ。斯く辛苦の中に、忠勤を盡すこと、十餘年の久しきに亘りて、一日の如くなりしかば、一郡の人も、世に珍らしき忠婢なりと褒めそやし、公けにも、感稱ありて、そが賞として、金若干を下だし賜ひけり。こは、最と近き程の事なるよし。實に、多藝女の如きは、得易からざる奇特の女子と言ふべし。

○沖村の波留女

波留女は、美濃國中島郡沖村の百姓、總內といふ者の女なり。家甚だ貧しければ、波留が十一歲の年、十年々期の約定にて、河內國八上郡、長曾根の農、德右衞門の許に奉公に出だされけり。然るに、德右衞門の家は、殊に富裕の身代なりしを、ふとしたる事の手違ひより、家產次第に傾きて、波留女が、十六七歲の頃には、最早、一家の器具衣服等さへ、一品も殘らず賣り拂ふまでに至りければ、婢僕も追々に暇を遣はし、今は波留女一人と成りぬ。其れにすら、給料はものかは、食料をさへ給する事能はずなりしかば、已むを得ず。一日、德右衞門夫婦は、近く波留女を膝下に招き寄せ、

のう、波留や、汝がこれまでの骨折は、私等夫婦も、大層悅んで居るのだが、知つての通りの始末で、もう何ともかたが無い。汝が居無くなつては、一層困るだらうけれども、給金は愚

か、恥かしいが、汝に食べさせる物さへ盡きてしまつたのだから、どうぞ、今日限りに、親里へ歸つてくれ。

主人が斯く言へば、妻は涙ながらに詞を繼ぎて、

ほんに昔の通りであつて、汝が首尾よう、家へ還ると言ふのなら、衣服の一つもこしらへても上うし、親兄弟へ、其れ〳〵の土産も持たせて遣らうもの、家へ還れたつて、旅費一つ上げないで、還れと言はれた義理では無いが、幸ひ、今度、美濃へ行くといふ仁があるので、其人に賴まうと思ふのだから、どうぞ、無慈悲の主だと思はずに、勘忍しておくれよ。……體を大事にして、恙なう還つての、後は涙にくれてえも言ひやらず。これを聞く波留女は、涙ををさめて、屹と形ちを正し、

えゝ勿體無い。お主樣のお口から、左樣な事、奉公人が御主人の爲に働きますのは、當然の事、其れにこの御家の御不幸、私が女で無うて、一人前の年でぐもあつたなら、斯うさせましはせぬものをと、悔しうて〳〵成りませぬ。ふつゝかな私ゆゑ、役に立たぬ。心に適はぬから出て行けと被爲仰りますのなら、據御座りませぬで、出てまゐりませうが、汝に遣る物が無いから、出てくれよと被爲仰りますのなら、私は出ませぬ。いえ、決して、お暇は頂戴致しませぬ。屹度、明日から、私の食べるもの丈は、だうにかして、作りますから、お役には立ちませずとも、どうぞ〳〵、これまで通り、お使ひ成されて下ださりませ。……若しお願ひで御座ります。旦那樣、御内室樣どうぞ、此儘、おさしをき下ださりませ。

手を合はせて伏し拜む健氣さ。妻は耐へず、波留女の手を取りて、

腑甲斐無き主人を、汝はそれほどまでに思うてくれるのか。そんなら、もう〳〵往ねとは言はぬ。一杯のお粥を、半分づゝ食べても一所に居て貰はうよ。

更に、夫の方にむきて

彼女がこれほどに言うてくれますから、居て貰はうじやありませぬか。

主人も打ちうなづきて、唯、感涙をほろ〳〵と膝に落しぬ。斯くて後は、波留女は、朝は夜明けぬ程より起き、夜は、一番鷄のうたふ迄も、眠らず、濺洗濯、賃仕事何くれ、勞き勤めて、其賃錢を以て、主家の生活をも助けくるが、德右衞門、また、病の床に就きて、枕も上らず成りにければ、波留女は一層の辛苦を增して、梳らぬ髪は、おごろと搔き垂れ、垢つける顏は、黑み汚れて、人か何とも見分き難きまで衰へたれども、主を思ふ心の清けさは、霜雪を經て、清香を放つ梅花よりもげに潔くぞ見えし。一夜、病める主人の、粥欲しと言ふに、波留女は、明日の粮にと貯へ置きし米のありけるを取り出だし、炊がんとしてけるに、折しも、雪深く積りたり。薪つきたればまたいかにとも詮すべ無し。夜だに明けたらんには、いかやうに才覺しても、折角、食慾つきたる病人に、粥作りてまゐらせましを、兎やせん角やせんと、思ひ廻らせども、別に良き手段も無し。惡き事とは思へども、病苦に勞るゝ主の爲、免させ給へと、神に念じて、隣家の軒に積み置ける、藁三把を取り來たらんとする時、其主人の用たしにとて出で來たるが、これを見て、大いに怒り、

此盜人め、……待て

と聲をかけくれば、波留女は、三把の藁を地上に置き、身を投げ伏して、

旦那様、どうぞ御免下ださりませ。實は、私方の旦那が、此間中からの大病、段々重りまして、此二三日は、食物がさつぱりまゐりませぬ所、今夜、珍らしう、粥が欲しいと言はしやります。ヤレ嬉しやと思うて見た所が、薪がちつとも御座りませぬ。夜中なり。此大雪なり。どうする事も出來ませぬので、悪い事と知りつゝ、默つて、藁を少しお貰ひ申したのです。……が、默つて、取れば盗人と言はれても、ちかたがありませぬ。嘸、憎い奴だと思召しませうから、どうぞ、宅の旦那様に、お粥を煮て上げますまで、お待下ださりませ。それから、私は、屹度、逃げも隠れも致しませんで、此所へまゐります。打つなと敲くなと、又は、縛つて、お上へお出し成さるなと成されて下ださりませ。私は、決してお恨みは申しませぬ。だうぞ、お慈悲をお願ひ申します。

泣く〳〵詫び入る波留女のありさまを見て、隣家の主人も大いに感じぬ。日頃よりの彼女が忠節は知りぬ。斯く言はれては、却りて、氣の毒の思ひを起し、

あゝ、憫然に、私が悪かつた。もう、私は何とも思はぬ。免して進ぜる。……ア、嘸困るだらう。サア〳〵、これを進ぜるから、早う往んで、粥煮て上げなされ。

と、一抱へ持ち出だしたる藁三十把、

ナ、此容子では、明日も雪じやろ。是れ丈あれば、暖まりも出來る。茶も湧かせる。どうぞ、精出して、旦那の看病しなされ。

げに、世に人鬼は無かりけり。情ある隣家の主人の、惠みくれたる、多くの藁は、時に取りての弘誓の舟なり。思ふ湊に追手の風得たるこゝちして、幾度か其高恩を謝し、家に還りて、粥を作り、病人にすゝめけるに、德右衞門は舌打ちして、

今夜は、いつに無う。粥が甘い。汝が上手に作つてくれたから、

波留女も悅べり。珍らしき病主人の笑顏に、我れも覺えず打ち笑まれて、

食物の味が出ましたら、屹度段々御病氣も宜うお成りなされませう。御心確かにお持ちなされて、早う御全快なされませ。

言ひ慰めて病人の眠りに就くまで、肩腰を撫でさすり居たる程に、八聲の鷄が音聞えそめて、東の窓ほの〴〵と白らみ渡りぬ。

其後、德右衞門は、やゝ輕快のもやうなりしも、また病勢の加はりて、翌年つひに亡人の數に入りぬ。其れよりしては、いとゞしく、賴む蔭無き後家を助けて、波留女は、いよ〳〵忠勤を勵みけるにぞ、此事、公けに聞えて、米十俵を賜ひ、其忠節を旌されける。波留女は、終生、此貧しき主家に事へ、主婦を送りし後も、なほ、手內職して、主の墓前に香華を斷たざりきとかや。

波留女は、實に、稀世の忠婢なりけり。年少にして、能く主家を、貧困の中に助け、一生を此所につくしけるは、例し少なき、美談と云ふべし。然れども、惜むらくは、波留女、正しき教へを聞かず。縱令、主人の爲なりとも、假初にも、隣家の物を盜まんとせしは、まことに遺憾の事ならずや。若し、隣人、不慈悲の者ならんには、或ひは、身に、罪科を蒙りて、あはれなる主人は、また助くるの道無きに至らん。幸

ひに、其人の惻隱の心を起して、其罪をゆるし、却りて、これを惠みたればこそ、彼女が志しを致す事も出で來たるなれ。されば、忠孝節義の道を行はんと欲する者も、能く其正不正を見分くる程の識見無き時は、往々、仁を爲すに過つ事をし出るものなり。彼の、親の爲、夫の爲と心得て、身を賤業におとし、節を穢し、志しを曲げて、以て、女の道を蹈めりと、心得る類ひの者も、みな、斯かる思ひ違へより生ずる事なり。故に、是れらの傳を讀む少女達は、波留女が如き、誠忠の女子の心ばえは、感ずべく、又其大方の行ひをも賞すべしと雖ども、他の物を盜まんとせし、行爲の如きは、爪憚きして、退くべきを思ふべし。君子は渴しても、盜泉の水は飲まず　ここそ言へ、書を見る時も、能く心して、取捨斟酌あらん事こそ肝要なれ。

三　同胞に友愛なりし小女

○夜叉姫

夜叉姫は、左馬頭源義朝が女なり。母は、美濃國、青墓の長が女なりければ、十一歳になるまで、其家に養はれたりけるに、父義朝は、平清盛と戰ひ負けて、尾張路に落ち延び、長田の爲に討たれぬ。兄、次郎中宮大夫朝長、負傷を負ひて、この長が家に隱れしが、こても遁るべきにあらねばこて、遂に、自害して失せけり。夜叉姫これを見て、幼き心地にも、いこいたう歎き悲しみ、

私には、兄君や姉君が、澤山都に在しますよしを聞いて、日頃より戀しう思うて、遇ひたい〳〵と考へて居たのに、不思議にも、兄朝長君が、此家へ御出で遊ばしたゆゑ、ヤレ嬉しやと

思ふ間も無く、自害してお果て成された。……聞けば、叔の佐殿(頼朝をいふ)も、彌平兵衛宗清にいけごられて、京へお引かれ成されてさうな。……戀しい懷かしい兄君に、もう遇ふこも出來ないでせうのに、佐殿は、京都で、さぞ、私の事をお案じ成されて、夜叉は、賤しい者の家に育つたんだから、屹度、命を惜しんで、まご〳〵して居て、必ず、平家の武士どもに捕らへられて、辱しめを見る事であらうと、思ぼして入らつしやるに違ひ無い。……イヽエ。私は決して〳〵、御兄君がたの御手足まどひには成りませぬ。此世の中で、御一所に居る事は出來なくとも、死出の山へは、御供を致します。後れは致しませぬ。どうぞ、是れほど、御兄君がたを思うて居る、夜叉姫を捨てないで、お連れ遊ばして下ださりませ。

と、兄朝長の位牌の前に搔きくどき、頓て、其眞夜中に、家を忍び出でゝ、株瀨川に身を投げてぞ失せにける。人々は、朝長の、此所に來たりしより此方、姫が、兄弟を思ふ心の切なるさまは知りつ。今また、其兄の面目を汚さじとて、自ら身を殺しつる、健

同胞に友愛なりし少女

氣なる志しに感涙を流して、いと惜しみ歎きけるこそ。我が國の人の、やゝもすれば、其身を潔うせんと欲して、死を急ぐ事の多きは、悼むべくして、強ちに稱すべきにはあらねど、幼少の夜叉姫、友愛の情の溢るゝ所、恥を知りて、死を恐れざりし志しは、いとも〳〵感歎愛悼すべき事にこそ。

○奈良左近が妹

奈良左近が妹は、性質優にやさしく、容貌また世に類ひ無かりければ、やう〳〵年頃に成りては、人の目をも引きやすかり。世は刈薦と亂れに亂れたる時にしあれば、兄の左近も心をつけて、假初のそぞろ歩きをだに、容易くはゆるさざりけり。然るに、左近が笛の師に、定光久右衛門尉といふ者あり。京の西岡と言ふ所にみやびたる家居をつらひて住まひけるが、左近とは殊に親しく行きかひて、内外の隔ても置かぬまで、心くま無く交らひつる程に、いつしか、左近が妹に思ひをかけて、いかにもして、申し請はゞやと案じけれども、既に定まる妻もある身なれば、いかにせんと躊躇しけり。されど、今は藏むにより無くて、或日、物しめやかに談らひける序に、

左近殿、斯う申さば、いかに、不躾なる者と思召さうなれども、是れ程までに思ひ詰めた事は、到底、耐忍の力も及びませぬ。と申すは、外でも御座らぬが、御前樣の御妹、容貌と言ひ、性質といひ、又何くれの技藝と言ひ、世にも類ひ無き、天晴の御方じゃ。アヽ、言ふ立派な婦人を妻にせずば、兎ても、家を顧る憂へ無くして、世に立つ事は出來ぬ。どうぞ、某が宿の妻には下

ださるまいか。……いや〳〵、始めより、氣に入らぬ、今の女房は、直に去つてしまいます。其れには御懸念なされぬやう。斯く言ひ續けたるに、左近は其薄情と身勝手とを悪むと雖ども、兎まれ、我が師の事にしあればと、わざと笑ひに紛らして、

これは〳〵何事かと存じたら、改まつた仰せ。……なれども、其れは心定御笑談でありませう。……見申せば、貞節な内室を、今更去る何のと、其れは御笑談にも、もう再び仰せあるな。はてさて痛はしい。……ハア、、、、某をおなぶり成さるくよな。

左近は、噺しを、餘事に紛らはしつるが、其れより後は、何と無く、快からず覺えければ、いつとは無しに、行きかひも始めには似ずなりて、時には、招かるくにも應ぜざる折さへぞ出で來にける。然るに、足利將軍義昭公、織田信長を頼みて、京都鎮撫の事を託し、自らは、本國寺に寓居せられける程、三好が一黨五千餘騎、不意に寄せて、將軍を攻め擊ちけり。寄手の兵には、奈良左近も加はりけるが、足利勢には、追々援兵も增加して、寄手遂に敗北し、人なだれを打ちて引いて行く。左近は寺の橋詰に好き敵を打ちつるが、亂るく味方に誘はれて、心ならずも落ち行く所に、後ろより聲をかくる者あり。

其れへ御越しあるは、奈良左近では無いか。きた無うも敵に後ろを見せらるくよ。……はや〳〵引つ返して勝負あれ。

左近振りかへりて見れば、師の定光なり。

心得ました。

言ひさま引き返す所を、勝ち誇りたる敵は、矢衾を作りて、差し詰

め引き詰め散々に射る。左近が身には、簑蟲の如く矢を負ひて、數ヶ所の手傷に耐へず、斃るゝ所を、定光走り寄りて、首を取る。左近、今般の心にも、敵味方と別るゝ上は、打つも打たるゝも、時の運にて、其は詮方も無き事なれども、假初ならず。長き年月師と呼び、弟子と呼ばれたる中なれば、殺すにも情はあるべきをと、心地よげなる定光が面てを恨みの眦に睨み詰めてぞ沒りける。定光は其儘に、左近が宅に驅けつけ、左近が妹を虜にして連れ還り、わが心に從ふべきよしを責めたり。妹は、心に思ふ旨あれども、色にも顯さず。定光にむかひて、

御承知の通り、此頃、許婚ありし、越中殿も、兄と前後して、お討たれ成されたと聞きますれば、今は誰れにたよるべき人も御座りませぬ故、單へに御蔭によるの外は御座りませぬ。去りながら、まだ母も居りまする事なれば、後刻までに、母の所へ、委細を文に認めて遣りまして、其上にて、思召しに從ひませう。

と云ふ。定光もげにもと承知して、紙硯取りまかなひて遣はし置き、酒宴の用意を命じたり。左近が妹は、殊更に、身の粧ひ潔くして、久右衛門尉に酒をすゝめ、何くれと談らひ、其醉の闌なるを見すまし、傍らなる刀を取りて、拔き放ち、

定光ッ。兄の敵覺悟ッ。

と呼ばゝりて、斬りつけ、遂に其場に討ち取りて、返す刀に自害して失せけるぞあはれなる。

母がもとへは、我が身、幼けなき時、父に別れ、兄の養育によりて、成長りたれば、一層、兄の恩の深きを覺え候ふ。然るに、當の敵に迫

られ、宿の妻になるべき旨を強ひられ候ふまゝに、今宵は、敵定光を討ち、兄の妄執を晴らさんと思ひ候ふ。彼れを討つことも討たるゝことも、最早、生きて再び相ひ見まゐらするよしも無し。先立つ不孝は、幾重にもみゆるしあれと認めて、長き形見にもと、綠の黑髪の末少しを切りて卷きこめたり。其文の奥に

思ひ川深き淵瀨ははやけれと誘ふ水には川を流さめ

とぞ書きたる。母はこれを見てさめ〳〵と打ち泣き、二人の若き子どもを先立て、老の身の、斯かる亂れ世に生きながらへて何かせん。待てしばし、死手三途の山も川も、諸共にこそ行かめとて、これも自害して果てにけり。

左近が妹、兄の仇を打ちて、其塲を去らず、自害して失せたる、こも亦、亂世に在りては、壯烈の志し、友愛の情、二つながらいみじと言はまし。

○大阪の富女

富女は、大阪松屋町の紙商某が長女なり。富女が七歳といふ年、父は亡き人の數に入りぬ。殘るは、母及び兄の仁三郎十四歳、弟は四歳と二歳とにて、未だ孰れも幼年なりければ、母の手一つにこれを養ひ、紙商ひと、兩替とにて、兎や角家名をおとさず活計を營み居けり。其翌年の秋、ある夜、三人の强盜、白刃を拔きて押し入りければ、母は惚てゝ、赤兒を懷ろにし、裏口より遁れ出でぬ。仁三郎も續きて、遁げ出でんとする所を、賊はむづと捕らへて、引き据ゑ、刃を眼のさきへ突きつけ、

ヤイ、小僧、早く、金の所在を言へ。言はずば、殺すぞ。

と嚇しけるに、仁三郎は、驚き恐れて、慄へながら、

私は、當家の傭人ですから、金の所在などは少しも存じませぬ。どうぞお免し下ださい。

と言へども更に聞き入れず。

こら〳〵、其樣な事を言つたつていけない。傭人だつて、此樣な小ぽけな宅で、知らぬ事があるものか。サア言へ言はぬか。

と又三つ四つ背打をなしければ、仁三郎はわつと叫びて、

御免下ださい〳〵

悲しき聲にわぶる程に、妹の富女は眼をさまし、何樣これは賊の入りて、兄を殺し、金を取らんとするなりと推し、靜かに起き出でゞ、小簞笥の中より、小さき包みを取り出だし、怖々ながら、賊の前へ出で、丁寧に楓の如き手をつかへて、

アノ皆樣、どうぞ兄樣を御免下ださい。其代り、私が持つてる同胸に友愛なりし少女

お金は皆上げまず。而して、兄様の代りに、私を殺して下ださい。ごうぞ願ひます。

始めこそあれ。一語々々精神加はりて、今は少しも猶豫せず。捕らへられたる兄を引き放ち、自ら、白刃の下に身を置きて、

サ、殺して下ださい。其代り兄様は殺すのじやありませぬよ。

更に兄の方に向き直りて、

兄様、早く御逃げなさい。早く〳〵

盗賊は、この健氣なる少女が有様にあつけに取られて、暫時は無言の儘、たちずくみて居たりしが、互ひに顔を見合はせて、

ナア、ごうだイ。この女は、感心な者だなア。己は押込もして、隨分人も殺したけれど、此様な感心な子は見た事は無い。いかに、荒仕事が商賣だつて、己達もまんざら、鬼でも蛇でも無いから、この兒には刃があてられないヤ。……エ、止さう。何だか心持が悪くなつて來た。

ム、と互ひにうなづき合ひ、

こら女兒、折角斯うして、來たけれども、汝の心がけが餘り感心だから、品も取らず。兒も免してやるんだ。……サ往かう。

強盗は、其儘に表の方へ飛び出だし、行方もわかずなりぬ。斯くて、其年の冬、是等の賊、官の手に捕らへられ、種々の罪跡を白狀に及びける時、この秋、斯う〳〵の所にて、箇様々々の少女に遇ひ候ひしが、其時ばかりは、もはや、荒仕事は止めんと思ひつるを、悪き癖、つひに禁じ難くて、再び強盗を働き、斯くの如く、お上のお手に遇ひ候ふなり　と申しければ、役人達、早速、松屋町を取り調べられしに、果たして、盗賊の言ひたるがごとくなりければ、富女、僅

かに、八歳の幼年を以て、能く兄が難にあたり、身を以てこれを救はんとせしは、まことに奇特の子なりとて、褒賞を與へられけり。其後、同所の豪商炭屋彦兵衛なる者、富女が行爲に感じ、母に請ひて、養女に貰ひ受け大切に育てけり。

幼稚なる富女、友愛の情厚きが故に、己れが身命の危きを忘れて、舍兄を救はんとし、なほ、貯への金を出だして、盜人に與へんとしたる可憐の心、至誠の行ひ、感ずるに餘りありと言ふべし。さるを、强盜の入りたるに驚き、惚てゝ最愛の小供等を打ち捨て、逃げ出だしたる母、又、其身の危きを遁れんとして、譎をかまへ、なほ遁るるに、道無くして、泣き惑ひたる兄、二つながら、智無く勇無き所爲、この少女に比べては、霄壤の差あるこそ笑止なれ。

○犬飼增女

備中國某郡山路村といふ所に、犬飼增女といふ者あり。幼き程より、心はえ直ほに、行ひ正しかりけり。父母は早くより病牀に伏して、更に家業に與ること能はざる上に、一人の弟、また天性虛弱にて、何事も爲すこと協はねば、增は年若き身に、田畑の耕耘より、煮焚裁縫のわざに至るまで、取りしたゝめ、ちとの暇ある毎に、幼き弟を勞はり慰むるさま、さながら、慈母の小兒を取り扱ふにも似たり。服し苦き藥など服さする時などには、色を柔らげ、聲を和らげて、さまゝ〳〵にすかしこしらへ、叮嚀にすゝむるなど、他に見るだに涙催さるゝばかりなりき。されば、この弟も、姉を見ること、恰かも父母の如くなりきとぞ。しかのみならず、增女は、裁縫、經濟の

道にも秀でたりしかば、或ひは、同村の少女を集めて、其道を教へ、又は、人の爲に賃仕事して、錢を得なご、少なからぬ家計の助けとなしゝが、長して後、弟は兎角して、やゝ病の床離るゝばかりに成りにけるまゝに、妻をむかへて一子を擧げたりしが、其妻早くみまかりて、弟、復た虚弱の身と成り果てにければ、再び後妻を娶るによし無く、幼兒の乳を戀ひて泣くもあはれなり。さるを、增女はいとほしき事にして、自らみごり兒を育み、父母はもとより、病める弟の看護を爲して、更に疲れたる氣色を見せず。一生、寡婦にて暮らしけるを、見聞きする人、皆感ぜざるもの無く、事遂に公けに聞え、縣廳より特に擢て、當地小學校の助教とせられたりき。

增女、其父母に孝なるのみならず、最も、其弟姪に友愛の情厚く、身を犧牲にして、家の爲に、一生を盡しぬる、實に例し稀なる篤實の女性といふべし。

○鐘尾不天女

不天女は、備後國福山の農、鐘尾廣助の妹なり。父は早く世を去りて、兄が養ひのもとに成長りしが、母も亦程なく死し、廣助は、不思議の災厄にかゝり、遂に入牢の身と成りぬ。外には近き親族もあらざれば、三人の女子いかにせん〳〵と悲しみ泣きて、食も咽に下ださず、たゞ額を集めては、打ち歎き居たりけり。姉の不天女、時に年十八歳、殘れるは皆其れよりも幼くて、物の用に立つべくもあらず。不天は、涙の隙より二人の妹を見て、

嗚呼、私は悪かつた。家中で、私が一番年長であるもの、斯うして、泣いてばかり居ては、本當に、おまへ方を、乾し殺してしま

うよりしかたが無い。兄樣は、いくら罪人におなり成されたつて、私達が、又、乞食になつて、人の手の中を願ふやうでは、亡き御兩親に對して申し譯が無い。サ、ぐづ〳〵して居ないで、働きませうよ。……お出で、一所に往かう。

と言ひさま、裾引きからげで、鍬をとり、田甫をさして立ち出づれば、今年十四歳なる妹も、

ハイまゐりませう

と同じく鍬を擔ひて立ち出でぬ。三女も續きて、出でんとするを、不天女とゞめて、

おまへは、小さいから、往つたつて、充分の仕事も出來無いから、其れより、內に居て、よくお留守居をしておくれよ。

十歳なる妹も、能く此言を聞き分きて、家を守り、洒掃何くれと、心の限り働きけり。斯くて後、不天女は、能く二人の妹を勞り慰めて、農業に力を盡しければ、富めるとにはあらねど、貧しきを憂ふばかりには至らず。やう〳〵朝夕の烟も豐かに立つることを得て、

同胞に友愛なりし少女

兄のもとへの差入れ物さへ、人には增して、充分なれば、兄も、妹の志しに感じて、ゐば〳〵感涙を催しぬ。公けにも此事を聞し召して、金子若干を賜ひ、其悌愛を賞せられきとぞ。

不天女、丁年に滿たずして、能く一家の產業を失はず、兄と妹とに友愛の情を盡し、又、能く婦道を守りて、其行ひを潔くするが如き、尋常女子が及ばざる所の者多し。公けの、之を嘉みして、賞金を賜はりぬる、まことに故あることなりかし。父母の厚き育みのもとに成長して、何不足無き家に、生れ合ひたる同胞達の、やゝもすれば、牆に鬩くことあるは、此不天女に對しても深く恥づべき事ならずや。

四　婢僕に對するに道を以てせし少女

○上東門院

申すも畏き御事ながら、一條天皇の中宮、御堂關白道長公の御女に渡らせ給ひ、皇太后と成らせ給ひし後、上東門院と申し奉りしは、御名を彰子と稱し申しき。此后、御年僅かに十二歲にて、入內をさせ給ひしが、其下に臨ませ給ふこと、威あり恩ありて、大人も及ばぬばかり、能く其臣僚を統御し給ひけり。一條天皇、嘗て、后の御殿に入り在しましける時、深く歎じて、宣はせし事ありき。后の在します方は、其器具調度より始めて、大方眼もかゞやくばかり、いと愛たきは言ふ迄も無く、侍らふ人々の、物ゐこやかにまめまめしく、事へ奉るさまの、いとあらまほしきに、后、まだいと若く在しますに、大人々〳〵しく打ちしづまりて、能く斯やうの、然るべき

人々を使ひ給ふことの道に恊はせ給ひけるこそ有難けれとて、深く尊敬し給ひけりこそ。

此宮の中には、當時名高き、紫式部なご言へる女官を始め、いづれも屈指の賢女才女を集めたるに、御年さへいと若く渡らせ給へる后の、いさゝかも、緩み無くて、能く其下に臨み、萬づにつけて、情深く在しましけるこそ、かへすゝも畏き事なれ。

此后は、ひとり、下に臨むに仁慈の御心ばえ深く渡らせ給ゐしのみならず、前后の御子に對し給へる、又、帝に對し給へる、すべて、女の道に恊ひて、何一つ、點つかるべき所在しまさゞりき。其上、學問技藝等も人より殊に優れて渡らせ給ひしよしげに、藤原のゆかり、比ぶ者無く、代々に榮えて、皇室と、其光榮をともにせられたりしも、亦偶然にはあらざりけり。

○毛利元次の女

毛利元次の女は、天性、溫和柔順なれども、亦自づから、犯し難き威嚴をそなへたる少女なりき。(元次は、周防國、德山の城主なり)嘗て、七歳の時、母を失ひ、媒姆の爲めに育てられたり。されば、この養育にたづさはりし婦人は、常に、己れ母親のごとき心持にて、しばしば、其幼き主を輕んずるやうの言行も少なからず。從ひて、他の傅の女たちも、主婦無き家庭のことゝて、時々、秩序の亂れ、規律の正しからぬさまの見ゆるを、この少女は、小供心に、いと憂き事に思ひ、いかにもして、この弊を矯むるよしもかなと思ひ廻らしぬ。斯くて、少女が十一歳といふ年、或時、媒姆をはじめ、奥向の女中、すべてを呼び集め、小さき紙包みを、一人々々に與へて、さて、少女は、先

づ、媒姆をかへりみ、これを上げるから、私の前で呑んで御覽、

女中達はいかなる品ぞと怪しみて、紙包みを開き見れば、こはいかに、細き針の入りたるにぞありける。中にも、媒姆は、むつとしたる顔つきにて、主の少女にむかひ、

貴女酷いじや御座りませぬか。針を呑めなんて、と、他の女中を見渡し、子ェ。左樣じや無いか。

女中も、異口同音に、ごうも針は呑めませぬ。

少女は、これを聞きて、でも、こんなに小さいんだもの、呑めない筈は無いワ。左樣言はないで、マア、呑んで御覽よ。

婢僕に對するに道を以てせし少女

媒姆は、ます〳〵憤りの色をあらはし、

ハイ、私共は、賤しい家に生れましたので、ハイ、お姫様のやうな、御立派な身分で御座りませぬから、無味い物ばかり食べて育ちました。……げれごもなんぼ、小さくでも、針は呑めませぬ。これでも、人間ですから。

少女は、屹度なりぬ。凛然たる聲を烈まして、

ごうしても呑めぬとな。……左様な小さい針が、……で、私は小さくとも、汝等の主人じや。主人となり、家來となれば、家來は主に從はねばならぬものである。……其れだのに、私が小さいと思つて、汝等は、日常、私を侮つて、不可いから、お止しと云つても、聞き入れぬ。斯うせよと言つても、直にしないやうな事が度々あるが、針のやうな小さい物でも、鋭い尖があれば、呑めぬと同じ事で、小さくても、主は主であるから、其命令は聞かねばならぬ。……是れまでの事は免すが、以來、私に對して、侮りがましいふるまひが再びあつたら、免しませぬ。直、阿爺に申して、處分を致すから、左様心得るやう。

一語々〳〵、力ありて、嚴かなる威儀、あたりを拂ひて、日頃に異なるありさまに、ありあふ女中ごもは、何と言ふべき詞も無く、覺えず、ハッ……と頭を下げて、しばらくは默然たりしが、やうやくにして、媒姆は、恐る〳〵面を上げ、

是れまで、姫様に對しまして、重々不心得な御奉公を致しまして、申し譯が御座りませぬ。全く私ごもが悪う御座りました。以來は、屹度謹みますから、ごうぞお免遊ばしませ。

餘の者も、諸共に恐れ入りたるよしを申しければ、少女は、いと滿

足なる體にて、

汝達が、左樣に惡いと心づけば、私もまことに言ひがひがあつて、嬉しう思ふ。

こいつもの優しき顏色にかへりしかば、女中達は、始めてほつと息をつきぬ。是れより後は、この少女の命令能く行はれて、恰かも、成人の主婦ある家庭の如く、何事も立派に整ふやうに成りぬとぞ。

凡そ、上たる者は、恩威並び行はれざれば、能く下を治むること能はざるものなり。されど、女子の如きは、兎角に威信重からずして、下に侮られ易きを常とす。況んや、齡十五にも滿たざる少女をや。然るに、この少女の怜悧なる、小君主を針に譬へて、數多の女中を威服せしめたる、其言行、實に、世にも珍らしき例しと言ふべし。

○荻山直女

直女は、美濃國、岩邑藩の家老、荻山某の女なり。幼少の頃より、仁愛の心深く、能く其召使を勞はり慈しみけり。或時、父某、秘藏の梅の鉢植を、庭に下ろして、下婢に水濺ぐことを命じぬ。下婢は、主人の命を受け、手桶に水を汲みて、搬びけるに、飼ひ犬の赤、頻りに、下婢にそばえつきて、追へども去らず。已むことを得ず。下婢は、犬をおごさんとて、邊りに在りける石を拾ひ、わざと、犬に中らぬやうに、飛び退きざま、抛げくるが、側らなる、腰掛臺の角に觸れ、石は、ね返りて、後ろに据ゑたる、青磁の鉢に中りければ、鉢はくわんと音して、四つ五つに破れぬ。下婢は、このありさまに、我れにもあらず。アッ……と叫び、眼ばたきもせず。その破れたる鉢を打ちまも

りて居たりしが、果ては耐へず。わい〳〵と泣き始めぬ。是時、主人は、既に外出して家に在らず。主婦も、部屋に籠りてや影も見えず。たゞ、十三四歳ばかりなる、少女直が、椽側に出でゝ、畫本やうの物を見てありしが、此泣聲に驚き、と見れば、新參の下婢が、庭の中央に立ちて、すゝり泣きに。泣くなりけり。直女は、靜かに庭下駄を穿きて、そのほとりに至り、

汝、どうしたの。……エ、何を泣くの。

斯く言ひつゝ、梅の鉢の破れて飛び散りたるを見、

オヤ〳〵、汝がこんなに破つたのかイ。

下婢は、ます〳〵泣き聲に成りて、

お孃樣、どう致しませう。……もう私は生きては居られませぬ。旦那樣の大事の〳〵、お植木鉢を破りました。どうしたら宜う御座いませう。

直女は、さも氣の毒さうに。

汝は、どうして破つたの

下婢は、幾度も、袖にて眼をこすり〳〵、斯樣〳〵と、犬を追はんとして、過ちて、石を、鉢に打ち中てたる事を咄し、

日常から、旦那樣が、汝は、そゝつかしいから、氣を附けないといかんぞと被爲仰たのに、こんな不調法をしたんですから、兎てもお詫はかないませぬ。

直女は、下婢を慰めて、

マア、そんなに泣かないで、私に任せてお置きよ。そして子私が阿爺にお詫をするから、其時は、何と言つて、お叱り遊ばしても、決して、一言も口返答をするのでは無いんだよ。……ヱ。

宜いかイ。

下婢は、少し生きかへりし樣なる容子にて、

ごうぞ、お孃樣、お助け下ださい。ごうぞ、宜いやうに願ひます。

手を合はせて、直女を伏し拜みぬ。さて、直女は、父の歸りを待ち受け、晩食も濟みて、機嫌よく物語りする、時機を見はからひ、叮嚀に手をつかへて、

阿爺、今、直が一生の願ひが御座りますが、お聞き下ださりませうか。

父は笑ひながら、愛らしき少女の顏を見やりて、

何じや、直、……改まつた。汝が願ひこいふは、

直女は、いよ〳〵眞面目になり、

何でも、本當にお聞き屆け下ださりませうか。

父も、ます〳〵打ち笑ひて、

他の者で無い。汝の願ひとあらば、聞いて遣はさう。

直女は、左も嬉しげなるさまして、

アノ、本當に、オ、嬉しい事。そんなら、ソラ、梅の植ゑてあります。青磁の鉢。彼れを、直に下ださりまするやう、

父は、不思議さうに、少女の顏を見て、

そんなに欲しければ遣つても宜いが、汝は、彼樣な物を貰うて、何にする。

斯く問はれて、直女は行き詰りぬ。されど、言はで已むべきにあらねば、再び口を開きて、

ごう致しましても、唯きつと、遣はすと云ふお詞が伺ひたう御座ります。

父は、小首を傾けながら、

妙な兒だのう。……其ん樣に欲しくば遣はすであらう。

是れを聞き終ると、直女は、次の間に控へさせたる、下婢を呼びて、

汝、……サ、……阿爺のお前へ出て、お詫をお言ひ。

下婢は、恐る〳〵、進み出で、手をつき、頭を下げ、左も悲しげなる聲して、涙ながらに、

ごうぞ、旦那樣、お免下ださりませ。

直女も、恭しく、頭を疊につけて、

彼女の不調法をお免し遊ばして下ださりませ。

父は、不審の眉を皺めて、

何と言ふ。汝達、二人は、何を、私に詫びるのじや。一寸ともわからぬでは無いか。

直女は、恐れ慎める色形ち、面てにあらばれつゝ、

是れだけ申し上げまして、おわかり遊ばしませんでせう。

まことに恐れ入ります。

と是れより、下婢が、過ちて、青磁の鉢を破りたる事より、其心配の容子をかたりて、

彼女が、其時の顏は、本當に、眞青で御座りまして、私は、今にも死ぬかと思ひましたぐらゐ、……ごうぞ、阿爺、彼の鉢は私に下ださつたと思召して、彼女をお免し遊ばして下ださりませ。

言ひつゝ、父の顏を、左も心配らしく打ちまもりたる眼には、一杯に涙をたゝへて、返答いかにと、かたづを呑みたるさま、何と譬へんやうも無きに、父は、そゞろに、我が子の慈愛深き心に感じては、

憤りの起らんやうも無し。たゞほつと溜息をつきて、平伏したる下婢をかへりみ、

汝は、宜い主を持つたのう。

暫らくして、

平常から、そゝつかしくて、荒つぽい女、……免し難い奴なれども、孃が、懇ろな詫に免じて、今度は免す。……以後を屹度慎しめよ。

下婢は、嬉しさに思はず、わつと泣きぬ。直女も、亦嬉しさに泣きぬ。

阿爺、まことに有難う御座りました。これ汝、能く御禮を申し上げて、そして、被爲仰つて戴いたやうに、以來、必ず〳〵、不調法の無いやうに、氣をつけておくれよ。……わかつたかイ。

斯く言はれたる下婢は、實に、直女に對しては、再生の恩人ここそ思ひつらめ。是れより後は、萬事に能く愼しみて、過ち少なき忠實の下婢となれいきこそ。まことに、感心なる物語りなりけり。直女、年少の身を以て、能く父をして、憤りを發せしめず。下婢が過ちを一身に引き受けて、圓滑に局を結びたる、其智其德、天晴少女の鑑とするに足れり。

この女子は、故ありて、一人の繼子ある家に嫁ぎたれども、其義理ある子に對する、實に、稱すべき慈母の行ひ多々ありて、當時の人の褒め者となりしよしなるが、其子は、壯年に死し、其孫二人を育てけるに、是れ亦、能く道にかなひて、孫女、他に嫁したる後も、祖母の事こし言へば、涙を流して、我れは、到底、この世にして、祖母の高恩に報ゆる事能はざるべし。と歎じたりと言ふにても、其一端を察すべきなり。

五　慈善の行ひありし少女

○山城の幼女

むかし、山城國久世郡なる或村の住民に、一人の女あり。この女、齢、僅かに七歳の時、法華普門品を讀みはじめたりしが、數月にして、其全部を誦じ卒りぬ。幼女は、天資賢きのみならず、物を慈しみ憐れむの心いと深くて、苟且にも、打ち腹立ちて、人に煩ひを及ぼす等の事無かりき。一日、近きほとりの村に遊びて、日暮れがたに、家に還らんとする時、三四人の小童の、大きなる蟹を捕らへ、既に、焚火して、炙らんとしつゝあるに遇ひぬ。幼女は、これを見て、例のいと悼ましと思ふ心起りて、禁ずること能はず。惚てゝ其傍らに走り寄り、

あら、ごうぞ其れを殺さないで下ださい。後生ですから、

小童等は、この詞を聞きて、頭を上げて見れば、年まだ幼なき少女の、泣き顔になりて、止

慈善の行ひありし少女

むるなりけり。小童は、容易に承知せず。

不可よ。これを免す事は、……折角、こんな大きなのを捕まへたんだもの、……是れから炙いて食ふんだ。

幼女はまず〳〵悲しめり。

左樣言はずに免してやつて下ださいよ。憫然だワ。……では、斯うしませう。あの、私の家には子。乾した大きいお魚が澤山あるの。……だから、この蟹を、家へ持つて來て下ださい。其お魚と代へて上げるから。……子、其方が宜いでせう。

小童は始めて承諾の色を示せり。

大きい甘い魚かイ。……左樣、……じやあ、往かう。

幼女は、家に走り歸り、父母に請ひて、其貯への魚と、蟹とを取り代へぬ。父母も、亦、慈悲心ある人なりければ、悅びて。女が請ひを容れ、快く魚を出だして、小童に取らせけり。幼女は、蟹を持ちて、小川の流れに至り、これを放ちて、

汝、もう、小童に見つかるやうな所へ出て居ては不可よ。……早く深い所へ隱れておしまい。

幼女は、左も嬉しげに、這ひ行く蟹を見送りて家に還りぬ。

斯くて後、大蛇の、この幼女を見入れて、取り去らんとせし時、數百の蟹來たりて、蛇を食ひ殺し、其恩に報いたりとあれども、此事はいかゞあらん。但し、幼女は、早くより佛門に志し深くて、慈悲善根にのみ思ひをひそめ、恩、蟲魚の末にまで及べるは、まことに最良じき事なりかし。但し、迷信の弊は、やゝもすれば、大事を後にして、小事を前にし、折角の、博愛慈善も、或ひは、其道にあたらざる所謂、婦人の仁と誹らるゝやうの事無きにしもあらず。これらの點に

は能く〳〵注意して、其宜しきを失はざらん事を期すべし。

○鈴木氏の少女

鈴木宇右衛門といふは、出羽國庄内の人なり。常に儉約を守りて、貧民を救ふことを樂しみとせしが、其妻も、亦、夫に劣らぬ慈善深き婦人なりき。斯くの如く、夫婦ともに、世に優れたる慈善者なれば、其子、亦いかでか、善き心を持たざるべき。一人子の女も、父母に讓らぬ情深き少女にぞ有りける。天明の凶年には、都も鄙も、至る所、みな、道に飢ゑ死にせる民ごもの、いと多くて、世は、物凄まじき、地獄の狀を呈するに至りぬ。其年の冬、氷閉ぢ、雪霰降りしきる頃と成りては、いとゞしく、貧しき民の飢ゑに叫び、凍えて泣く聲、天地に滿ち〳〵て、眼もあてられぬ有樣なるに、今日は、朝まだきより、降り出でし雪、をやみもあらず。風さへ添ひて、行來の人も絶えたる夕暮がた、鈴木が家の門外によろぼひ立てる、一人の少女、年は、僅かに、十一二歳とおぼしきが、身には、海苔のごゝく搔き垂れたるつゞれを着、頭には、破れたる菅笠を戴きたる、顏の色は、青み頰の肉は落ちて、さながら、餓鬼のこゝちするに、かれたる聲を絞りて、

ごうぞ、何なりと、食べる物を下ださい。……お慈悲です。食を請ひつゝ、家の内をさしのぞけり。妻は、是れを見て、あゝ、憫然に、あの容子では、定めて、もう、一日も二日も食べないで居たのだらう。其れに、この大雪に、破れた單物一つ、……兎ても、生きて居られるものでは無い。

斯く言ひつゝ、あたりを見まはして、

ほんに、今年は、秋からかけて、家の貯へはみな施してしまつて、遂に、自分の着がへ迄、賣り盡したんだから、もう、施すものは何にも無い。

ほつと歎息の聲を洩らして、焚火のほこりに在る、わが女兒を見かへり。

あれ、御覽、彼の乞食を、……衣服は薄し。食物は無し。嘸、苦しからう。……見れば、年も、汝と同じ位、……ごうだイ。汝の二枚着て居る衣服一つ、彼女にやつては吳れまいか。背丈も、ちようど、宜いだらう。汝の衣服には、綿が厚く入つて居るから、一枚脱いでも寒くもあるまい。もう、今から、半月足らずで、寒も明けるから、段々暖になる、……子、若し寒くば、寐衣の重ね着しても濟むから、

今年、十一歳なる少女は、欣然として悅び勇めり。恰かも、世の常の少女が、美服貰ひし時の如く、尙其れよりも、喜悅の情禁ずる能はざるが如く見えたり。母の詞未だ終らざるに、自ら、手早く帶を解きて、表なる衣を脱ぎ、

母樣、ごうぞ、遣つて頂戴よ。早くよ。あゝ寒からう。……あの、私は子、ちつとも、寒くないの。これ御覽なさい。こんなに暖かいの。……子、子、

と、母の手を、我が手に持ち添へて、己れが肌をさぐらせたる健氣さ。表着の宜き方を取りて、乞食の少女に與へぬ。母も、我が子の慈悲深きに、且つ感じ、且つ悅び、早速呼び入れて、其衣服を與へ、食事をすゝめて、焚火に暖を取らせければ、少女は、たゞ有難涙にくれて、しばし詞も、出だし得ぬに、主人がたの少女も、いとゞ貰ひ泣き

して懇ろに勞はり慰めけり。

嗚呼、斯くの如き、父母あり。亦、斯くの如き、少女無からんやは。いと

もく、感ずべき慈善の行ひと言はまし。

六　才學に秀でたりし少女

○有智子內親王

有智子內親王は、弘仁天皇の第三の皇女なり。幼く在します頃より、萬づ怜悧しく、記憶ことにすぐれて渡らせ給ひけり。斯くて、其齡、十歲にも滿ち給はぬ程より、好みて漢學を讀み習ひ給ひけるが、其疑ひを說き、義を講じ給へること、大人の學者も、おさ〳〵舌を卷きて、其高說に服するばかりなりき。內親王は、御年いと若くて、賀茂の齋院に立ち給へり。をりから、櫻の花盛りなる頃、帝、齋院に行幸成りて、花の宴せさせ給ひける時、帝は、群臣に詔りし給ひて、

春日山莊　といふを題にて、おの〳〵、韻を探らせて、詩を作らせ給ひけり。內親王は其程、御齡、僅かに十七歲に在しましき。蒼める花の、今まさに開かんとする御容貌、氣高く麗はしき事、物に譬へんやうも無く、匂ひやかに艶めきたる綠の御髮は、いろ〳〵の浮紋織り出だしたる、御小袿衣の上にたまりて、長く、後ろに引かれ給へるも愛たし。帝は、姫宮を顧みさせ給ひて、

いかに、趣考は立ちましたか。

と仰せられければ、宮は、恥かしげに打ち畏こまりて、にこやかにほゝ笑み給ひつゝ、御料紙取り上げて、人より先きに、さら〳〵と書き流し、帝に奉らせ給ひつゝる御作は、

寂々幽莊山樹裏、　仙興一降一池塘、　棲林孤鳥識春澤、

隱澗寒花見日光、　泉聲近報初雷響、　山色高晴暮雨行、
從此更知恩顧渥、　生涯何以答穹蒼、

帝は、この詩を御覽じて、深く感歎せさせ給ひ、是れより、群臣の詩作を一々御覽じけれども、みな、內親王が御作に優るもの無かりければ、いよ〳〵御機嫌うるはしくて、

姫宮は、まことに天品の學才がある。こても、他の者の及ぶ所で無い。

大いに、御稱揚あらせられて、即刻、三品の位を、內親王におくらせ給ひぬ。

すべて、上がたの子弟は、多くは、幼き程より、御側の人々の、出來得る限り、力を盡し、心を添へて、稽古事をすゝめ進らする故に、大概、年よりも、よく出來るやうに見ゆれども、所謂、表面より、滅金したるが多ければ、年經るまゝに、其滅金は剝げて、拙き木地のあらはるゝが少なからぬ中に、有智子內親王のごときは、眞に、天品の才在しましける上に、御好學の性、いよゝます〳〵、勉勵の功を積みて、まことに世の秀才と仰がれ給ふに到れる、いと珍らかに有難き事なり。

○繪島の海女

むかし、中納言行平卿、犯せる罪ありて、播州須磨の浦に流されけり。ありし都の館には、詩歌管絃の樂しみに、長き日の暮るゝを早しと惜みし身の、今日は、配流人となりては、岸打つ波、松吹く風の外には、音なふ友も無くて、寐覺の枕に聞く、千鳥の聲も、袖を霑ほすなかだちと成りぬ。あはれ、汀に出でゝ、釣りする海人のむれに

入り、魚だにあさりて時を費やさんとて、釣竿を手にし、男童一人を伴なひ、磯づたひして、繪島の浦松の蔭に坐をしめて、釣を垂れつゝ在しけるに、をりふし引く網の綱に取りつきて、何事とも聞えぬ事罵りさわぎ居る、海人の少女子、同じ樣に振り亂したる髪の色艶も無く、男か女かとも見わき難き、怪しの姿したる者のみある中に、年の頃、十七八歳ばかりとおぼしき海女の、容貌優れて、麗しきがありけり。行平、深く怪しみ思ひて、男童して、其少女を呼ばしむれども、今、事しげくれば、得往かずといふを、強ひて、伴ひて、卿のほとりに侍らせければ、行平、

汝は、やはり、此所等に住まひする海女か。他の者と異なりて見ゆるが、……汝の家は何處ぞ。我れに知らせよ。

と問はれけるに、海女は、たゞ

白波のよするなぎさに世を過ごす
海人の子なれば宿もさだめず

一首の歌を詠じて、この集へる海人少女が群に入りて、搔き消すごとく失せにけり。卿は、しばし茫然として、其隱れし方を見送られしが、

あゝ、惜い事をした。……誰れであらう。何でも、世の常の海人少女ではあるまいと思うたのに、……行方を見失なうて殘念な事をした。

斯く歎息せられたりき。さて、卿、赦免の後、都に還り登りて、人々にも、この歌物語せられければ、何人の子、何の故に、斯かる才女の、波寄する汀に隱れ住むらんこいとゆかしく覺えて、後の世にも傳へけんかし。

この海女が詠みたる歌の意は、斯く、白波の何處とも無くて、寄せる渚に、はかなく、漁りの業して、世の生計をなしつゝある、海人の子にてある故に、何處を宿とも定めぬのであるから、此所ぞと、住家を名のり參らすることは出來申さずと答へたるなり。往昔の人は、鄙の少女も、歌詠みしける優しき者、少なからねば、其類ひにも、あるべけれど、此歌の見識ありて見ゆるは、何樣、よしある人の世に隠れたるなどにもやありけん。

○石見の海女

是れも、繪島の海女に能く似たる咄しなり。時も、行平の卿と、餘り隔たらぬ程なるべし。されど、この卿の名、誰れとも、物の本に見えず。むかし、ある、公卿の、石見の國司に成りて、其國に下だられけるが、或時、海邊に出でゝ、海人の漁りするさまを見て、打ち興じ在しけり。伴なる人の、

海人ごもが、歌を謠ひまする。甚だ騷がしいもので御座りまするが、また、これも一興であらせられませうから、召して、謠はせて、御覽遊ばしては、いかゞであらせられませう。

公卿は、打ちうなづきて、

其れは、一段と、面白からう。宜きやうに、

とありければ、其所に集へる海人を召して、漁歌謠はせけり。兎角する程に、他の海人少女ども、此所彼所より、集まり來て、この歌謠ふ者を見る。其中に、年齢十七八歳ばかりにて、容貌優れて、麗しく、起ちぶるまひ、何と無く、品高く見ゆる少女の、公卿が供なる童招ぎ寄せて、

あの、ごうぞ、御前に召されて、歌を謠うて居りまする仲間の者へ、かやうに言うたと、お傳へ下ださりませ。

叮嚀に賴みて、さて、

諸共にあさりしものを濱千鳥
いかに雲井に立ちのぼるらん

才學に秀でたりし少女

と一首の歌を傳へけり。公卿、これを聞きて、是れは不思議だ。實に感心な事である。かやうな、片田舎の海女が、歌を詠むことは、……しかも中々の名歌じゃ。近う呼べ。褒美を取らせう。

人を走らせて、取り寄せられたる、紫の織物の小袿衣一重ね、彼の少女にたまはりけるに、少女は、これを手にだも取らず。

紫の雲のうはぎをなにかせん

かづきのみする海人の子なれば
一首の歌を殘して、辭し去らんとしければ、公卿は、いよ〳〵感心して、其家をも探らせ、さて遂に、夫人になして、都へも伴なはんと勸められけれども、少女は敢て承引かず。

私一人の身に取りては、此上も無い出世で御座りますから、御供を致したいのは山々ですが、家には、老いたる母が在りますから、達て御斷りを申上げます。

公卿は、この孝心を聞きて、ます〳〵、捨て難き者に思はれければ、しば〳〵人を遣はして、この老母に誨し、母子諸共に、供なふべければとありしかば、少女も、やう〳〵に承諾して、この公卿の夫人と成り、打ち連れて、都へ登りけるこそ。

少女が詠みたる前の歌の意は、今迄一所に漁りして居たのに、彼の我れらが友達は、どうして、左樣に汝達ばかり、御前に召されて出て、歌など謠うて、お聞きに入るゝやうに成られしぞ　こいふ意を、汀にあさりし千鳥に譬へて詠める面白き歌なり。　又後の歌の意は、　斯かる愛たき賜物、有難うは候へども、貴人の召すやうな結構なる、小袿衣などを戴きて、何と致さうぞ。波をかづきて、漁りばかりしつゝある、海人の子にてある故に、　この意にて、紫は、雲といふ詞の枕詞故、其衣の色にかけて、斯く詠めるにて、かづきも、衣服に緣ある語をつかひたり。能く働きたる歌にて、才氣の程も推し量らるゝなり。

○延政門院

延政門院は、後嵯峨天皇の皇女なり。御齡、僅かに、四歲に成らせ給

ひし程より、能く論語を讀みて、ほゞ其義に通じ給ひ、八歳にしては、既に能く、文章を綴り給ひぬ。其頃、御父仙洞御所へまゐる人の、皇女の御前に出でゝ、

唯今より、仙洞御所へ參りまするが、何か、御用はあらせられませぬか。

と伺ひ奉りぬ。皇女は、今、御硯召して、何やらん、冗書して遊び在しけるが、これを聞かせ給ひて、

あゝ、左樣か。其れならば、一寸、これを、御父君に奉つて貰いたい。

斯く仰せられて、さら〳〵と、御懷紙に認め、押し卷きて、其人に取らせ給ひければ、何事を書き給ひけんと思ひながら、御所へ持ちてまゐりて奉りけるにぞ、御所には、直ちに披きて御覽ぜられけ

れば、

ふたつ文字
牛の角文字
すぐな文字
曲み文字
こぞ
君は
おぼゆる

と一首の歌を遊ばされけり。此歌を說けば、ふたつ文字は、に

才學に秀でたりし少女

こなり、牛の角文字は、い　こなり、すぐな文字は、し　こなり、ゆがみ文字は、く　こなる故、こいしく、父君の御事は思ひ奉るぞ　といふ意を詠み給ひしなり。御所を始め、ありとある人々も皆感歎の聲を斷たず。幾度も打ち吟じつゝ、又今更に、皇女が、御才學の優れさせ給へる、まことに恐ろしきまでに覺ゆると言ひあへりきとぞ。げに、十歳にも滿ち給はぬ、幼き御方の、御趣考としては眞實ならずと思はるゝばかり、いと巧みに詠じ給ひしものかな。

○掄子女王

掄子女王は、鎌倉の將軍、宗高親王の御女なり。未だ御幼少の頃より、深く、御心を經書に寄せ給ひて、其義をさとり給ふこと、亦いとさかしく在しましけり。或時、御側の女中達に說き聞かせ給ふやうは、

私は、十三經といふ、聖人のお書き成された書物を、殊の外、尊んで、わからぬながら、常にたび〳〵繙いて見るが、其中には、いろ〳〵人の行ふべき道が敎へてあつて、何一つ、不用だと思ふものは無いけれども、其意味の最も深く最も尊く思はれるのは、かやうな事で。　凡そ、道德仁義は、人の食である故に、これを得る時は、山中でも、海底でも、能く身を養ふ事が出來、これを失へば、帝都、又は、金殿の內にても饑ゑて死ぬるものである　とは、まことに、さる事と思はれるから、何は措きても、人と生れた者は、聖賢の道を學ばねばならぬと、心得よ。斯樣に敎へさせ給ふ程ありて、女王は、日常の御身もち正しく在

しまして、たゞ御樂しみとては、書を讀み、文を作り給ふ等の事のみなりきと言へり。

女王天品の才賢く在しまして、幼なく渡らせ給ふ頃より、漢籍の中にては、最もむつかしき經書をさへも、讀み明らめ給ふ程なれば、其他の御學問に、秀で給ひけんさまは、推し量らるべし。斯くて、女王は、正しき書を見て、正しき行ひを、實地に爲し給ひしよしなれば、是れをこそ、眞に、物識りと申し奉るべきなれ。徒らに、眼にのみ見、耳にのみ聞き、口にのみ言ひても、其事の行はれざるは、眞成の學者にはあらずかし。

○平親清女

平親清が二女は、天資孝心深きのみならず、文才世に秀でゝ、殊に歌人の名ありき。父沒しける時、少女が哀悼世の常に超えて、しばしは、絶えも入りぬべくぞ見えし。斯くて、中陰果てける日詠みける歌、

今日までもながらふべしと思ひきや
別れしまゝの心なりせば

この歌の意は　今日までも、我れは生きながらへて、世にありぬべきものとは、思ひもかけざりしよ。まことに、父に別れ奉りし、其日のごとき心にてありしならんには、兎ても、一人生き殘りてはあられざりけんものを、さても〳〵、我れながら淺間しの心やげに、世の諺に、　去る者は、日々に疎し　と言ひ置きつるが、我れさへ、其理りに洩れず。彼れ程までに、思ひまゐらせし、父君の御上さへ、やはり、去る者は、日々に疎くなる心あればこそ、絶え入るばか

り歎きし程過ぎれば、今日迄も、生きて居らるゝならめ。この意にて、實に親を思ふ至誠至情より出でたる歌なれば、斯く、人の心も動かすばかり、最良じく出來たるには、相違無けれど、猶、天才の優れたる、歌の達人ならずば、かほどには、よも出來まじ。繰りかへし吟ずれば、今も、涙のこぼれて、見ぬいにしへの事さへ、思ひ浮べらるゝやうに覺ゆかし。

す、べて、花鳥風月の詩歌は、いかに面白く、いか程巧みに出來たるものも、數多度吟ずれば、次第々々に、味ひ薄くなり行くやうの心地せらるゝものなるを、猶、親の爲、君の爲、又は世の爲など言へる心ばえ籠りたるは、吟ずる度に、趣味深くなるを覺ゆるぞ最良き。

○井上通女

通女は、讃岐國丸龜藩士井上氏の女なり。生れて、年僅かに八九歳に及べる頃より、能く書を讀み、又能く詩歌を作りぬ。斯くて、十八歳といふ年より、藩主の夫人に事へ、國文詠歌の師と仰がれ、奥向の女中達にも、尊敬を受くること大方ならざりき。さて、いくほども無く、夫人に從ひて、江戸に趣きける途中の日記を、東海紀行と號けたるが、當時名高き、婦人中の名文なりきとぞ。其歸る時も、亦、日記を書きて、これを、歸家日記と言へり。又、或時、盤珪和尚と儒道佛道の優り劣りを、互ひに討論したる時、通女が讀みて示したる歌、

常に行く道なればこそ世をうみの
海人ののりたる舟もたのまめ

と詠じぬ。こは、通女は、佛道よりも、儒道を高しと信じたる故に、其

意を詠みあらはしたるにて、常に、人の行くべき道を行くにてあれば、別に他の方法をこふにも及ばじ。若し行くべからざる道を行かんこするやうの事あらんには、佛力にも依賴すべきならめ。我れは、儒道を以て、自ら守る。何ぞ、佛道によらんや。この意味なり。兎にも角にも、當時の女性中には、多く見ること難き、一種、卓絶の氣象を備へたる女子にてぞありけんこ、此一首の歌を見ても想ひやらるかし。但し、此歌は、言ひまはし少し、むつかしくして、ちこ、意の十分に通らぬやうの嫌ひ無きにあらず。されこ、通女が生れし頃は、戰國の代、僅かに終りを告げて、人みな太平を謠ふに至りたれども、社會は、なほ、劒の光、砲の響の、物凄き名殘をこめて、文學、美術なごは、まだ影だに見えざりし世に、通女、一人、巾幗の中に、秀でたる、文藻詞花を匂はせたる、まこごに、名譽の事こ言ふべし。

○加賀の千代女

千代女は、加賀國、松坂こいふ所の人なり。幼き頃より、俳諧を好み、折に觸れ、物につけて、詠み出づるもの、早く人の稱賛する所こなりたれども、自らは、田舍に住む身の口惜しさ、良き師に從ひて、技を磨くここ能はざるを、いこ憂き事に思ひけり。然るに、美濃の國の盧元坊こ稱する俳諧の宗匠ぞ近國に於ては、先づ、當時の名人なるべきこ、人の告げたるに、千代女は、いかにもして、美濃に至り、其人に就きて、學ばごやこ思ひけれども、年少なる女子の身にては、免さるべくもあらず。いかにせんこ、心をいら立ちけり。然に、恰かもよし。盧元坊、ゆくり無くも、同國に杖を曳きて、遊歷するに遇

ひぬ。是れを聞きたる千代女は、天にも昇るこゝちして、悅ぶ事大方ならず、早速、其旅舍を訪ひて、入門を請ひけり。其時、宗匠は、旅途の勞れ休めんとて、枕をこりて横たはり居たりしが、斯く〳〵の少女來たりて、教へを請ふよし言ひ入れければ、

其れなら、此所へ通しておくれ。

と取次の下婢に命じぬ。下婢は立ちて、千代女を案内せり。千代女は叮嚀に禮を施して、

これは、お初に御目にかゝりました。私は、千代と申すふつゝか者で御座ります。どうぞ宜しう。

宗匠は、起きなほりて、

ハア、左樣かな。……あの、何かェ。俳諧が修行したいとな。

千代　左樣で御座ります。兼ねて、御高名をお慕ひ申して居りましたる所、幸ひにも、當地へ御出遊ばしたと承はりまして、取敢ず、お願ひに上つたので御座ります。

宗匠　其れなら、一つ、時鳥といふ題でやつて御覽、

時は、夏のはじめにて、降りみ降らずみ定め無き空のけしき、まことに、風流人の、初音待つべき折なりけり。千代女は、畏こまりて、忽ち、一句を案じ出だして、宗匠に見せけるに、其句の尋常ならぬを見て、是れは、よくしたてなば、一角のものになるべしと思ひける故、わざと、冷やかに笑ひて、

アハ、、、、、わざ〳〵尋ねて來て、修行したいと言はれたから、も少し出來るかと思つたら、これは丸で、白人じゃ。こんな事ではしかたが無い。もう一つやつて御覽、

千代女は、顏打ち赤めて、

畏こまりました。

又一句々々と、五六句作りけれども、みな悉く退けられぬ。斯くて、宗匠は、枕引き寄せて、眠りにけり。されど、千代女はなほ去らず。眼の覺むるを待ちて、又作りて見せけれども、其れにてもよしと言はれず。既に數十句を作る程に、東の窓やうやく白みて、曉告ぐる鳥の聲、耳もとに響きければ、また寐の夢破れたる宗匠は、眼をこすり〳〵起きかへりて、

ごうだイ。名句が出來たかイ。

と問はれたる千代女は、

時鳥々々とてあけにけり。

と吟じたれば、宗匠、小膝をはたと打ちて、

アヽこれじや〳〵、天晴の名句じや。これを忘れずに、いよいよ精を出したならば、必ず、名人になるであらう。

宗匠、大きに悅びて、つひに、其時、師弟のちなみを結びけりとぞ。其後、千代女は、世に聞えたる俳諧の名人とぞなりにける。千代女は、容貌、餘りに麗しからず、且つ、身體いたく肥滿したる人なりき。或時、或所を通りけるを、